

はじめに

「つながり 寄り添う」

本活動記録のタイトルをこのようにしたものの、「つながり」「寄り添う」という言葉を簡単に使ってはいけないと、未曾有の大災害から1年が経過した今、強く感じています。被災された方の思いに寄り添い、必要な支援を…と思いながらも、心の内に抱えるいいのない悲しみや苦しみに触れた時、「寄り添う」ことの難しさを感じずにはいられません。

本協会は昨年4月、岩手県遠野市に活動拠点「岩手県遠野災害ボランティア支援センター（愛称：遠野まごころ寮）」を設置し、支援活動をはじめました。被災地へのボランティア派遣は4月7日より12月末までに38回、1,121名が参加し、主に陸前高田市・大槌町・釜石市で活動してきました。そして、2月・3月は仮設住宅に暮らす方々の生活を支援する「仮設住宅応援ボランティア」を派遣しました。

そこでは多くの出会いがありました。地元の方、共に活動する仲間、そして地元に根付く文化、そこに暮らす人々の強さに触れました。また、そこから生まれた「縁」があります。「縁」が深い絆を生み、その輪が広がっていきました。この「縁」を大切につながっていきたい、そんな思いが、私たちの活動の背中を押してくれています。

亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、厳しい復興への道のりを歩んでいく一人ひとりの気持ちに寄り添い続けながら、私たちはこれからも活動を継続していきます。

この震災は、私たちが地域のつながりを改めて考えるきっかけになりました。いつ起きてもおかしくないといわれる東海地震に備え、現地支援とあわせて足元を見つめていきたいと思います。

最後に、東日本大震災被災地へのボランティア支援の取り組みが、平成23年度、24年度の2カ年にわたり「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」に選定され、応援いただけることに厚くお礼申し上げます。

平成24年3月31日

特定非営利活動法人
静岡県ボランティア協会
理事長 神田均

つながり 寄り添う

－東日本大震災被災地支援活動の記録－

もくじ

■はじめに 1

特定非営利活動法人静岡県ボランティア協会 理事長 神田均

■静岡県ボランティア協会の取り組み 3

1. 震災直後の取り組み

－「ボランティア活動支援募金」の呼びかけ

－被災地に毛布を送る活動

2. 岩手県遠野災害ボランティア支援センターの設置

3. 静岡県災害ボランティアの派遣

4. 高校生のボランティア派遣

5. 仮設住宅応援ボランティアの派遣

6. 仮設住宅の被災者に静岡の“みかん”を贈る運動

7. 震災から1年「3月11日」

8. 復興支援シンポジウム・講演会の開催

9. 相談対応

■静岡県災害ボランティア（第1次隊～38次隊）活動記録 46

■資料編 51

1. 静岡県災害ボランティア派遣 実績報告

2. 静岡県災害ボランティア派遣 募集要項

3. 関連新聞記事

4. 後方支援ネットワーク NPO 法人遠野まごころネット リーフレット



東日本大震災被災地支援活動の取り組み

平成23年3月11日（金）午後2時46分、東北地方三陸沖を震源とするマグニチュード9.0を記録する巨大地震が発生。東北地方を中心に太平洋沿岸部には、その地震による大津波が襲来し、火災も発生するなど甚大な被害をもたらしました。

本協会では地震発生直後から、「東海地震等に備えた災害ボランティアネットワーク委員会」や民間ボランティア・市民活動推進機関など関係機関・団体、また、静岡県等との情報交換をはじめ、被災地支援について検討、取り組みをはじめました。

1. 震災直後の取り組み

- 「ボランティア活動支援募金」の呼びかけ
- 被災地に毛布を送る活動

(「ボランティア情報静岡」2011年5月号より)



①3月13日～19日「毛布を送る活動」

3月13日、福島県に入ったNPO関係者より避難所に毛布の絶対数が足りないとの連絡がありました。「毛布50,000枚を至急送ってほしい」との要請を受け、13日朝、報道機関に対して「被災地に毛布を送る活動」を開始することを訴え、5万枚の毛布募集に取り掛かりました。

しかしながら、被災地で必要な物資は日々変化するものです。活動を始めた後、現地から「毛布が手配できた」という連絡も受け始めました。そこで、私たちは福島県に限らず、必要なところはないか、日頃からつながりをもつNPOへ

地震発生の翌日3月12日より、街頭募金の呼びかけを始めました。過去にない広範囲にわたる被害の大きさから、これから復興に向けた多くのボランティアによる支援活動が必要になると考えたためです。

この募金は「義捐金」とは異なります。私たちは、被災地での活動を円滑に行うため「ボランティア支援募金」の協力を求めました。

被災地でボランティアが活動するには、宿泊拠点の確保、資機材の手配、またボランティアの力を最大限に活かすために、ボランティーセンターの運営にかかる費用も必要になります。

毎日の街頭募金には、市内の中・高校生を中心に、大学生、社会人など265名のボランティアが協力下さり、2,838,769円が寄せられました。



連絡をとったり、災害対策本部への問い合わせをはじめました。すると、原発避難民の受け入れをはじめた福島県近隣の市町より、「毛布がほしい」との声が聞こえてきました。そこで、福島、山形、岩手へお届させていただきました。この活動は、報道のみならず、本協会ホームページ、ブログへの掲載、ツイッターでの広がりを見せ、1週間で2,586件、21,843枚が寄せられ、延べ317名によるボランティアが協力をくださいました。

そして、毛布を届ける活動に取り組みながら、被災地の様子を知り、今後の支援活動を検討するために、スタッフが現地に向かいました。交通手段も十分にない中、毛布を届けるトラックに同乗し、調査をはじめたのです。

②送料カンパについて

毛布提供にあたり、民間の運送業者で福島まで荷物を送った際の料金を参考に、1枚あたり1,000円の送料カンパをお願いしました。福島・山形・岩手に毛布を送るため、主に14トンのトラックを手配。カンパは、車両代、燃料代、東京までの高速代などに充当させていただきました。

なお、送料カンパの協力について、必ずしも枚数×1,000円ではなく、枚数が増えた場合については気持ちで協力をお願いする旨をお伝えしました。

送料カンパ総額 8,235,107円 (1,803件/3月26日現在)

ボランティアによる協力

日	人数(人)	活動内容
3月15日(火)	35	毛布の整理・仕分け・トラックへ積み込みなど
3月16日(水)	44	毛布の整理・仕分け・トラックへ積み込み 電話応対、データ入力など
3月17日(木)	50	毛布の整理・仕分け・トラックへ積み込み 電話応対、データ入力など
3月18日(金)	58	毛布の整理・仕分け・トラックへ積み込み 電話応対、データ入力など
3月19日(土)	93	毛布の整理・仕分け・トラックへ積み込み 電話応対、データ入力など
3月20日(日)	37	毛布の整理・仕分け・トラックへ積み込み 電話応対、データ入力など
合計	317	

<収集件数・枚数> 2,586件 21,843枚



<収集件数・枚数> 2,588 件 21,845 枚

日付	枚数			件数		
	持参	宅配	計	持参	宅配	件数計
3月 14 日	661	165	826	238	39	277
3月 15 日	1,335	359	1,694	326	122	448
3月 16 日	2,321	753	3,074	245	251	496
3月 17 日	1,744	883	2,627	228	200	428
3月 18 日	4,319	550	4,869	271	195	466
3月 19 日	3,925	485	4,410	371	85	456
3月 20 日			37	12	3	15
3月 21 日	1	1	2	1	1	2
浜松	4,306		4,306			0
合計	18,612	3,196	21,845	1,692	896	2,588

※なお、浜松市では浜松市社会福祉協議会が窓口となり、約 4,300 枚が市民より寄せられた。但し、浜松市社会福祉協議会で 1 件と数えている。

※同様に、湖西市・磐田市、掛川市、森町、藤枝市、焼津市、御前崎市、伊豆の国市、伊東市、西伊豆町の各社会福祉協議会も地域の受付窓口となつてくださり、100 枚単位で協力をいただいた。件数カウントでは、各社会福祉協議会は 1 件となっている。

※他にも、多くの企業・団体・組織・有志などで集め提供いただいた。

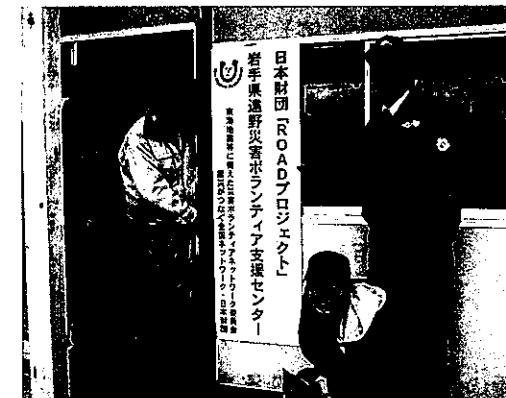
送付先 15 か所

No	発 日	送付先	枚数
1	3月 14 日 (月)	生活クラブ山形 (山形県米沢市)	500
2	3月 16 日 (水)	三春町災害対策本部 (福島県三春町)	1,500
3	3月 17 日 (木)	生活クラブ山形 (山形県米沢市)	2,500
4	3月 17 日 (木)	ハートネット福島・吉田 (福島県郡山市)	2,200
5	3月 18 日 (金)	相馬市災害対策本部 (福島県相馬市)	2,150
6	3月 18 日 (金)	田村市役所 (福島県田村市)	2,000
7	3月 19 日 (土)	山形県川西町役場 (山形県川西町) 山形県長井市役所 (山形県長井市)	2,200
8	3月 19 日 (土)	花巻市役所 (岩手県花巻市)	2,280
9	3月 20 日 (日)	山形県南陽市中央公民館 (山形県南陽市) 高畠町役場 (山形県高畠町)	2,200
10	3月 20 日 (日)	山形県長井市役場 (山形県長井市) 山形県上山市役場 (山形県上山市)	2,230
11	3月 21 日 (祝)	山形県体育馆・武道館 (山形県山形市)	1,400
12	3月 25 日 (金)	いわき市災害対策本部 (福島県いわき市)	500

2. 岩手県遠野災害ボランティア支援センターの設置

本協会では、日本財団ROADプロジェクトの一環として、日本財団・震災がつなぐ全国ネットワーク・東海地震等に備えた災害ボランティアネットワーク委員会の三者合同で、岩手県遠野市にボランティアの拠点となる「岩手県遠野災害ボランティア支援センター(遠野まごころ寮)」を設置しました。

遠野まごころ寮には常駐のスタッフを配置し、静岡や東京、神戸などの遠隔地から支援活動に参加するボランティアの宿泊拠点として、また、「遠野被災地支援ボランティアネットワーク(遠野まごころネット)」の後方支援拠点として、同ネットとの連携を基本に支援活動を行っています。



(1) 遠野災害ボランティア支援センター「愛称：まごころ寮」設置、整備

設置者：東海地震等に備えた災害ボランティアネットワーク委員会
震災がつなぐ全国ネットワーク
日本財団

所在地：岩手県遠野市大工町 10-10 遠野浄化センター内

設備：30 塊 2 室 (男女 1 部屋ずつ)、トイレ、洗面所、洗濯機 (2 台)

①設置・整備

3月 28 日 (月) : 工事着工

4月 8 日 (金) : 開所

開所式出席者：遠野市長 本田敏秋様

遠野市社会福祉協議会会長 白井悦男様

静岡県危機管理部危機管理監兼危機管理部長 小林佐登志様
遠野市職員、第 1 次先遣隊の参加あり。

静岡県ボランティア協会職員 2 名 (鳥羽局長・久保田)

運転ボランティア 2 名

日本財団 (ROADプロジェクト担当) 2 名

5月 20 日 (金) : シャワー棟完成

袋井市今井地区岩手県応援団の寄付により設置

7月 13 日 (水) : 管理棟完成

9月 9 日 (金) : コマツハウスプレハブ設置 (資機材庫&宿泊用)

②スタッフの雇用

4月 8 日～7月 8 日 : 1 名

4月 11 日～5月 15 日 : 1 名

6月 15 日～8月 10 日 : 1 名

7月 10 日～8月 6 日 : 1 名 (有償ボランティア) ※

7月 21 日～ : 4 名 (スタッフ 2 名・パート 2 名)

③利用団体

静岡県災害ボランティア／聖隸福祉事業団／日本老人福祉財団／日本財團ROADプロジェクト（足湯隊・学生ボランティア）／被災地NGO協働センター（不良ボランティア）
本協会を通した利用申し込み（市社会福祉協議会・災害ボランティアコーディネーターの会・静岡県教育委員会）など

(2) リフトバス運転ボランティアによる支援活動協力

①毛布を贈る運動

3月14日（月）山形県米沢市（届け先：生活クラブ山形）

運転ボランティア2名

②遠野まごころネット支援

期間：3月24日～5月9日

内容：遠野まごころネットによる支援活動協力

・デイサービス利用（避難所からお年寄りをお風呂へ送迎）

・ボランティア支援（現場での活動に送迎）

協力運転ボランティア：のべ38名



3. 静岡県災害ボランティアの派遣

4月7日（木）出発の第1次先遣隊より12月末まで、毎週木曜日に、38週連続（38回）で、1,121名のボランティアを派遣しました。11月からは仮設住宅に暮らす人々の支援のためのボランティア派遣を合わせて行いました。

そして、2月・3月は39名が「仮設住宅応援ボランティア」として、活動しています。

4月5日～募集開始 200名を岩手県へ

4月7日 第1次先遣隊出発！

時を同じくし、静岡では、拠点設置の報告を受け、先遣隊ボランティアの派遣を検討していました。

本協会では、平常時より東海地震等に備えた県内外の災害ボランティア関係者との関係づくりをしています。そこでまずは、関係者にボランティア先遣隊として現地に入っていただき、次いで、一般ボランティアを募集することをはじめました。震災直後より「何かできることはないか」「被災地に行き、お手伝いをしたい」と多数の問い合わせを受けていた本協会は、ボランティア募集を案内するやいなや、電話回線がパンクするほどの問い合わせ、そして申込みをいただき、わずか1日半で4月・5月のボランティア募集200名の定員に達しました。



オリエンテーション

そして4月7日（木）19時、第1次先遣隊のボランティア25名が静岡県総合社会福祉会館に集合しました。

1時間のオリエンテーションを行い、ボランティア派遣の目的、被災された方に向き合うために必要な心構えなどを確認し、岩手県遠野市に向けて出発しました。

岩手までのバス移動は、11時間かります。静岡を出発した先遣隊も順調に北上していましたが、約3時間後の23時20分頃、震度5強の揺れがあり、津波警報も発令されました。「行くべきか、戻るべきか…」事務局はその判断を委ねられましたが、「行く」ことを決め、バスは進んだのです。先遣隊ボランティアは「行くだけ行こう。ダメなら仕方がない」と、気持ちは一つに…。そして、その思いはハンドルを握っていたバスの運転手さんも同じでした。

高速道路が通行止めになつたため、一般道を使い、バスは岩手に向かったのです。

また、その時、先遣隊を待つ岩手県遠野市は地震で停電となり、真っ暗な中で揺れを観測し、停電となる中、静岡からのバスを待っていたのでした。

4月8日センター開所式

-ボランティア活動開始-

思いを一つにしたボランティアを乗せたバスが、岩手県遠野市に到着したのは、翌日の12時15分頃でした。

開所式には、遠野市長の本田敏秋様、遠野市社会福祉協議会会长の臼井悦男様、静岡県より危機管理部危機管理監兼危機管理部長の小林佐登志様にもご列席いただきました。

本田市長様より「遠野市では、人と人、産業ととの交流の中で地域づくりをしてきました。今回生まれた支援の輪を受け止め、今後の復興につなげていきたい」とお話をいただきました。また社会福祉協議会の臼井会長より、「被災された方たち、そして地域に、微笑みが戻るように支援をしていきたい。心強い支援をありがとうございます」とお言葉をいただきました。

ボランティアにできることは、被災地、被災者の方に寄り添い、支援活動をすることです。関係者との関わりを大切にしながら、微笑みが戻るような支援を継続していきたいと考えます。

そして、支援における行政との連携も大切にしたいと考えています。私たちの活動に全面的なご理解と協力をいただいた遠野市はもとより、静岡県との関係もさらに大切にしながら支援活動に取り組んでいきたいと考えています。

ボランティアの活動

翌4月9日よりボランティアの活動が開始されました。活動内容は、遠野まごころネットの調整により決定されます。

第1次先遣隊の活動は、陸前高田市の高田小学校からの依頼でした。4月20日の学校再開（始業式）を控え、子どもたちが元気に過ごせるように、体育館をキレイにしてほしい。また校



遠野市 本田市長



第1次先遣隊も参加し開所式を



第1次隊：校庭の整地作業・ガラスの破片とり

庭には仮設住宅が建設されることになっており、子どもたちが遊ぶことできる場所は限られるため、限られた場所が安全な場所となるよう、泥のかきだし、ガラス破片の撤去などをほしい、とのことでした。

当初、この作業は学校の先生方だけで何とかしなくては…と考えていたようです。しかし、先生方も被災されており、ご自宅の片付けなど、しなくてはならないことが山積みです。そこにボランティアの応援が入り、大きな力となつたのでした。

作業を続ける中で分かることも多くありました。この体育馆が仮の遺体安置所であったこと、学校周辺を見渡すと警察官や自衛隊員の姿があり、行方不明者の捜索活動が続けられていること…。

そして、この活動は2次隊にも引き継がれ、マットや跳び箱の清掃や土砂を除いた床の拭き掃除など、「子どもたちのために…」とボランティアは作業を続けました。

第2次隊・第3次隊では、家屋の泥のかきだしや、避難所・仮設住宅で靴の配布、荷降ろし、被災した水産加工会社の冷凍倉庫から流れ出た魚を回収・撤去する作業なども行いました。すべてが、地域に暮らす人にとって必要な活動でした。

◇◇◇

長く続く復興への道のり。地元の方たちにとって、必要な支援となるよう、地元の声を聞きながら、関わりを続けたいと思います。



第2次隊：学校に寄せられた荷物の荷降ろし



第3次隊：魚の回収作業



第3次隊：家屋の泥のかきだし

■ボランティア派遣（4月～12月／バス派遣）の流れ

1. 事前準備

募集要項の作成。
ホームページに要項掲載、及び報道機関を通じ参加者募集



申込み受付
申込者の調整・参加決定
参加者へ電話にて連絡→参加案内の発送

【参加案内】

- ・日程、持ち物等のご案内
- ・誓約書・健康チェックシート
- ・被爆風予防リーフレット



参加者名簿作成
○受入れ団体（遠野まごころネット）へ連絡
○宿泊拠点（遠野まごころ寮）へ連絡
災害派遣等従事車両証明の申請

2. 出発日

【オリエンテーション】

- 受付確認
 - ・旅費受取り
 - ・ボランティア保険加入確認
 - ・誓約書・健康チェックシート提出（確認）
 - ・食事注文受付

【配布物】

- ・オリエンテーション資料（しおり）
- ・ビブス

○オリエンテーション

- ・実施内容の確認（目的・活動内容など）
- ・活動にあたっての心構え
- 参考：「東日本大震災 災害ボランティア活動に初めて参加される方へ」（JCN作成）
- ・グループごと顔合わせ（自己紹介）
- ・直近の現地情報の提供

○乗車確認



3. 現地での活動

- ・毎夕、ミーティング（ふりかえり）
- ・遠野語り部「いいろり火の会」さんより遠野の昔話をお話いただく

2月・3月の「仮設住宅応援ボランティア」募集にあたっては、事前に説明会を実施し、活動について理解いただいた上で、参加申込みの意思を確認。その上で、オリエンテーションを実施した。

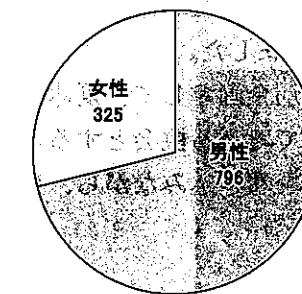


4. 活動終了後

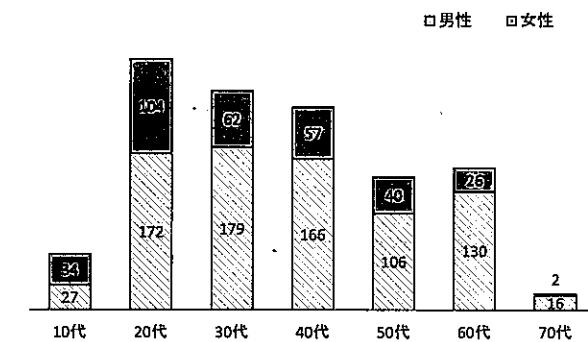
アンケート回収、集計
活動報告のまとめ（関係者共有）

【参加者】

参加者内訳（男女別）



参加者内訳（年代別）

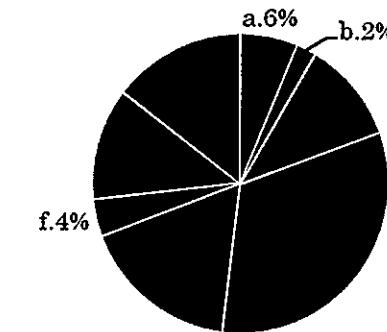


□男性 □女性

【参加者アンケートより】

1. 今回のボランティア募集はどこで知りましたか？

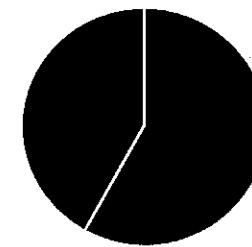
- a 新聞
- b テレビ
- c ラジオ
- d 静岡県ボランティア協会ホームページ
- e 職場で
- f 社会福祉協議会で
- g 友人・知人から
- h その他



2. これまでに

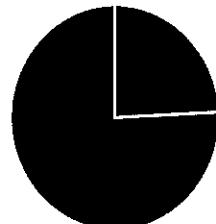
ボランティア活動をしたことがありますか？

- a ある
- b ない



3. これまでに災害ボランティアに関する講座や訓練に参加したことがありますか？

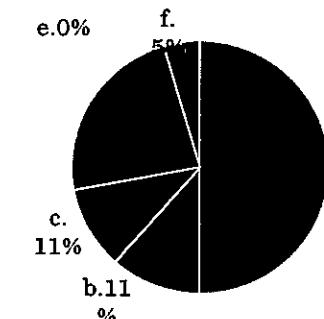
- a ある
- b ない



5. 今後、どのようななかたちで支援活動に参加したいと思いますか？

（複数回答可）

- a 今回のようにボランティアバスで参加したい
- b 所属するボランティアグループなどの活動に参加したい
- c 個人で情報を集めて被災地で活動したい
- d 募金や情報提供などの後方支援活動を行いたい
- e 参加する予定はない
- f その他



4. 高校生のボランティア派遣

「高校生にもできることはないだろうか」と相談を受けていた本協会では、夏休みを利用して、高校生の災害ボランティアを派遣することを決定しました。

「第30回サマーショートボランティア活動計画」特別企画として、夏休みを利用して、実際に現地を訪れ、活動し、震災やボランティアについて考える機会とすることを目的としました。あわせて、静岡に戻った高校生が学校や地域を巻き込みながら、被災地支援に取り組んでもらうことを願い実施しました。

募集期間 7月1日（金）～7月20日（水）消印有効

事前研修会 （実施日）8月3日（水）

（会場）静岡県総合社会福祉会館2階

現地研修 8月7日（日）～11日（木）

ふりかえりの会 9月11日（日）

応募者 124名（52校）

参加決定者 高校生24名・一般（大学生・教員）5名

<事前研修>

日 程：8月3日（水）

内 容：

- 「高校生へメッセージ」

- 「被災地で活動するということ」
 - 初めて災害ボランティアに参加する方へ
 - みんなで考えよう！
 - ①災害ってなに！？
 - ②「被災する」ってどういうこと？

◦大学生よりメッセージ

「ボランティア私はこう考える」

静岡英和学院大学 久保田 琴さん

◦意見交換

「ボランティア『わたしは』こう考える」

「今、私にできること」



<現地研修（活動）>

日 程：8月7日（日）～8月11日（木）

活動内容：

- 陸前高田市気仙町上長部地区での田畠のガレキ撤去

ひまわりプロジェクト参加

◦おおつち保育園八木澤園長より「いのちを守る」お話

◦「希望の灯」実行委員会東梅守さんよりお話

◦大槌高校の生徒たちと交流

（「ボランティア情報静岡」2011年9月号より）

縁からつながる復興への絆

～高校生の東日本大震災支援活動～



自分の目で現地の状況を見て、感じることで、今、自分たちが何をすべきか、分かるはず

8月7日（日）20時、24名の高校生と大学生2名、そして高校教員3名が東日本大震災の被災地である岩手県遠野市へ向かいました。3月11日の震災直後から「高校生にできることはないか」「東海地震を考えると決して他人ごとではない」と胸に抱いてきた参加者たち。現地を訪ね、何を感じ、考えたのでしょうか。

今特集では、東日本大震災静岡県災害ボランティア “高校生ボランティア派遣計画”について紹介、報告します。

■はじめに

静岡県ボランティア協会（以下、本協会）では夏のボランティア体験プログラム「サマーショートボランティア活動計画」を実施しています（※）。今回、その特別プログラムとして、「東日本大震災被災地支援ボランティア “高校生ボランティア派遣計画”」の実施を決めました。

※サマーショートボランティアとは、夏休みを利用したボランティア活動体験の機会として、社会福祉施設や社会教育施設で活動するボランティア体験プログラムです。高齢者施設・障害者施設等での活動を通して「福祉」「ボランティア」「障害」について考える機会になっています。

高校生が実際に、被災地に足を運び、ボランティア活動に参加し、地元の方々との交流を通して「ボランティア」「復興」「地域」について学び、静岡に戻った彼らが学校や地域を巻き込みながら、被災地支援に取り組んでいくことを願い、現地に向かいました。

■陸前高田市での活動

ひまわりの種プロジェクト参加

現地1日目は、遠野まごころネットの調整により陸前高田市気仙町上長部地区的「ひまわりプロジェクト」に参加をしました。このプロジェクトは、ひまわりを植えることで、津波により塩分を含んでしまった土の塩分を吸収し、土壤を改善する効果があることから取り組まれているものです。

■「子どもの命を守る

～3月11日　おおつち保育園で起きたこと～

おおつち保育園　八木澤弓美子園長のお話より　（事務局要約）

現地2日目には、大槌町を訪ね、おおつち保育園の八木澤園長よりお話をうかがいました。



3月11日14時46分、子どもたちがお昼寝から起きる頃、前プレなくカタカタと静かに園舎が揺れました。私は各教室を周り「先生のそばにいれば大丈夫だよ」と子どもたちに声をかけて周り、園児全員に声をかけ終わった頃には、3~4歳の子どもたちは防災頭巾をかぶり、保育士の指示のもとジャンバーを着て備えていました。

いつもの避難訓練では、全員で園庭に集まり、それから近くのコンビニに避難していましたが、この時にはコンビニに向かう道路は渋滞、コンビニ到着後も大型トラックが15台ほど停まっており、何が起きているのか、今どんな状況なのか、全く分かりませんでした。

外の情報を得るためにワンセグでニュースを確認すると、釜石の魚市場の様子が一瞬映り、町全体が煙に包まれ、はじめは火事のように思いましたが、遠くの電柱が一本ずつ倒れ津波が来ていることを知ったのです。

街から逃げていく人は、コンビニを通りすぎ、さらに高台を目指していました。その時、昔からの言い伝えである「津波の時は高台に避難する」ことを思い出し、ゴオオーガーバリバリと音がし津波がくる中、子どもの手をにぎりながら「走れ」「大丈夫」と声をかけ、避難者の応援をもらいながら子どもたちをバケツリレーのようにして山の上に避難させたのです。

おおつち保育園では、保育園に保護者が迎えにきた9名の子どもが命を失いました。

子どもの命を守ることが保育士の仕事であり、安心安全を守ることが大事なのに、子どもを死なせてしまったことに保育士失格だ、保育士をやめようと思いました。しかし、ある子どもの祖母が「最後まで子どもを愛してくれてありがとう」と話してくれたのです。



私はこの言葉に救われました。そして、この津波で亡くなった子どもが成長し小学校にあがる頃には入学式の話題になるでしょう。その時に、その思いを誰かが受け止めが必要になります。私は、このことから逃げずに一緒に背負っていきたいと思います。そして、今育てている子どもたちが育ち、これから成長していく過程で「生きていてよかった」「大槌で育ってよかった」と思ってもらえるようにしたいと考えています。

津波でんでんこ…昔からの言い伝えの通り「津波が来たら高い所に逃げる」「自分の命は自分で守る」。今度は私たちが伝える側です。みんなもどうやって自分の命を守るのか、家族と確認をしてください。



このお話ののち、高校生たちは子どもたちがたどった避難経路を実際にたどりました。こんな急な山をかけあがるのか…というほどの急斜面を、子どもたちも保育士たちも登ったのです。

■希望の灯りプロジェクト



現地3日目の8月10日。翌日は震災から5か月となる8月11日です。大槌町ではお盆を前に、キャンドルナイトが予定されました。被災し、電気が消えてしまった町を、暗くなりがちな被災者の心を優しく照らし、復興に向けた一步を歩めるよう願いを込め開催されました。

町では希望の灯り実行委員会が組織され、この日、高校生たちは実行委員の一人である東梅さんからお話をうかがいました。東梅さんは「復興に向け、大人と子どもの意見が必要となります。子どもの中には本音を言えない子どももいるが、一人でも多くの意見を聞くことができるようメッセージ入りの希望の灯を作成したい」と話されました。そして、友人へのメッセージ、これからに向けたメッセージなど、寄せられた中にある声なき声や心の声を大切にしたいと加えられました。

高校生たちは大槌高校の学生とともにペットボトルを使った灯籠づくりなどの準備にも取り組みました。

静岡縣

静岡雙葉高等学校1年 河原崎彩佳

私は今年の夏、東日本大震災の被災地である岩手県へ、災害ボランティアの一員として行く機会をいたしました。見渡す限り人が住んでいたという形跡がなく、唯一そこが海に面した町であつたことを教えてくれました。ネットや携帯電話が普及し、便利な時代を生きる私達は、世界中どこにいてもつながつていられる。では、何らかの手段で連絡をとり合い、知り合っている者同士の間だけにある関係を“つながり”と言うのだろうか。



(右端) 河原崎さん(希望の灯りづくり)

今、私にできること～高校生の感想より～

僕と同じ班で一緒に製作をした2人は同学年の1年生で、震災の影響で卒業式が行えなかったり、津波で家が流されてしまったりしたそうです。でも、すごく明るく接してくれ、何か勇気みたいなものを与えてもらったような気がしました。同学年の人と話すことでこの震災がより身近に感じました。このボランティアを通して、この震災や大変な状況をより自分のこととして考える必要があると思いました。もちろん、現地の人達とは状況も違うから、全く自分事とは考えられないかもしれないけれどより近くに寄り添い、僕たちは僕たちなりにこの震災に立ちすわかいたいと強く思いました。

(県立浜松西高校 武山巧)

1

私たちはたった3日間という短い期間しかお手伝いできなかつたが、この3日間の間、何回「ありがとう」を言われただろう。ほんの少しことしか手伝えなかつたが、今考えるとたつた何時間かで保育園内を掃除して、何時間かで保育園の草むしりができた。私が今回強く思ったことはもっとボランティアが必要ではないか、ということだ。高校生の私たちにできることはたかがしれているかもしれないが、もっと多くの人々が現地に行って現状を把握して、今何を求めているのかを知る必要があると思う。

(加藤学園暁秀高校 植田さやか)

1

今回の活動を通して、まず感じたのが人と人のつながりでした。被災された方々が今、一生懸命に頑張っていられるのは、つながりがあるからだと思いました。園長先生の言葉から“亡くなった人とのつながり”も見えました。実際、被害にあったところを見たり、そこに立ってみたりして、体全体で感じた時は、テレビで感じたことのない暗い気持ちになりました。しかし、地元のボランティアの方々や高校生からはたくさんの元気をもらい、たった3日間でしたが、今日よりも明日はもっと頑張ろうという気持ちになりました。

(静岡雙葉高校 河原崎彩佳)

1

活動を通してたくさんの人と出会った。人にはその人が生きた分だけの時間が凝縮されていることを知った。たくさんの人と会って話をしたいと思うようになった。そして、その人の気持ちを想像したい。立場を考えてみたい。今回活動するにあたり、「自分のことのように考えて行動すること」を目標とした。あまりできたように思えない。地震の恐ろしさは分かった。ただ、家族や友達や故郷を失った悲しみは私にはよく分からない。誰かと全く同じ気持ちになることはできない。だが、なろうすることはできる。他者の痛みを自分の痛みとして実感するか、しようとするか、これが「他人事として考えない」ことであり、大事なことだと思う。

(県立富士東高校 田中望由季)

「一チコンテスト」最優秀賞
静岡雙葉高等学校1年 河原崎彩佳
がり」

れたのは、家具の混じった瓦礫の山でした。津波にのまれた町は、バスから一步外に出ると、海から離れている所でも不思議となんなく海においがし、少し土を掘れば服や教科書などの日用品があふれるように出てきました。畑の中に船がさかさまになつてゐるという光景も目の当たりにしました。そんな悲惨な状況の中、私は笑顔が印象的な同い年の2人の女の子に出会いました。私は、静岡県と岩手県それぞれの方言の話や好きな芸能人の話で盛り上がり、初対面とは思えないほど打ち解けていきました。その後地元の方言で2人はこんなことを言いました。

「震災でなあ、うちんちは流されたつべ。保育園からの親友も死んじやつた。けど、周りには今でもお父さん探している人とかいるんだべ。だから、私の悩みなんでちっぽけって思った。亡くなつた人たちの分も頑張らなきや！一生懸生きないとね！」

「うちんちはな、津波で友達んち突つ込んだべー。今じや、全部笑い話だで。いつまでも昔の話してたつてしようがない。もうみんな前向いているで。」

方言の混じつた2人の言葉は、私は余計心に突き刺さるものがありました。

また、ある保育園の園長先生は震災で亡くなつた園児の話を同じ保育園に通つていた5・6歳の子供たちに、正直にこう話したと言います。

私はこのことを知つて、気づいたことがあります。それは、震災の後、大切な人を失い絶望の中にいる人へ生きる希望を与えたのは、その亡くなつた人自身であるということです全く関わりのない私ですら、被災された人が亡くなつた人のために一生懸命生きる姿を見ることで、生きる希望をもらいました。つまり、私達は、亡くなつた人や見知らぬ人ともつながつていると言えるのではないでしようか。つながつているから、その人たちのためにも今、一生懸命生きようと思えるのではないかでしょうか。

人は誰かとつながつていい生き物です。だから、他の動物には持ち得ない電話やコンピュータという電

この震災は人と人とのつながりを確かめるに自然から与えられた試練であるとも考えられます。私達は常に誰かとつながっています。しかし、電話やメールで連絡をとつている者同士の間だけがつながっているのではなく、全く知らない人や亡くなつた相手とも“つながり”は存在しているのです。それこそが「絆」ではないでしょうか。みんなの力を貸してください。揚力して無駄なことなど一つもないのですから。みなさん一人一人が「絆」をつなげる大切な存在なのです。

津波にのまれて、苦しくても、助けてもらえたかった子がいたの。でもね、神様が、天使に変えて、神様の国に連れて行ってくれたんだよ。その子たちは神様の国から見てるから、その子たちの分も頑張って生きていくだよ。」と。
「子供たちは泣きながらも真剣に話を聞いていたそうです。さらに、子供達は震災のときに怖い想いをした場所にもかかわらず、保育園に戻りたいと言つていたそうです。私はそんな子供達の強い気持ちに感動しました。

どんなに悩んでも、どんなに願つても、もう手に入らないものがある。どんなに叫んでも、どんなに泣いても、もう戻つてこない人がいる。そんな中で、わずか5・6歳の子でも現実を受け入れ、頑張って生きていふことを知りました。自分の故郷のため、自分のかけがえのないもののために。そして、亡くなつた人のた

みなさんは誰かのために頑張ろうと思つたことはありませんか。また、それがたとえ、この世を去つた人であつても、見知らぬ誰かであつたとしても、誰かのおかげで頑張れたということはありませんか。実際、私はボランティアとして一生懸命頑張る力をくれたのは、被災された方とこの世に残された亡くなつた方々の気持ちでした。だから私は東北の人々とつながつてゐると思つています。

人間がどんなに時間をかけて建てた物も津波は一瞬にして持つていってしまう。自然環境に人は勝てません。それは今までこれからもそうでしょう。人間一人一人はとても小さな存在です。でもだからこそ、「人間」という一つの“つながり”の中にある私達は協力しなければならないのではないか。し、本当のつながりは電子機器の中にはないと思います。

5. 11月「仮設住宅応援ボランティア」の派遣

被災地の状況は時間の経過とともに変化しています。ボランティアの活動も変化します。そこで、11月からは仮設住宅に暮らす方々を支援するための活動に参加をはじめました。まごころネットの活動プログラムにある、個別訪問による聞き取り・生活補助などをを行う生活支援班、お茶会の開催等による交流の場づくりなどを主としたcafé隊の活動に主に参加しました。

また3月からは「しづおか足湯隊」として、遠野市内・釜石市内の仮設住宅に関わらせていただいています。足湯ボランティアには、一対一でお話を聞くことで「心のケア」や、「被災者の課題をつかむ」ことにつながったり、人が集まるコミュニティづくりの場を生みだす効果があると言われています。しかし、単にそうしたことを行うための「手段」ではなく、お湯に足をつけてゆっくりしてもらうことで元気ができるという、足湯が本来持っている「力」があるようです。

足湯隊の聞いたつぶやきをご紹介します。

○大事なもん全部流された・・・気持ちもね。

きもちのくぎりができないねえ・・・。(70代女性)

○はじめは生きてるだけありがたかったけど・・・こっちはおいしい魚食べられなくてさあ(笑)

○静岡の人には本当に世話になったから静岡が地震の時は必ず行くからさあ(50代男性)

○ボランティアさん来てくれて本当感謝してるよ。泣いてばかりもいられないからさ・・・地震あつたらなんも持たずにてんでに逃げてな(東海地震にふれ)。海はあんなにきれいなのにねえ。

○昨年は桜きれいだと思えなかった。今年はきれいに思えるかねえ?(50代女性)

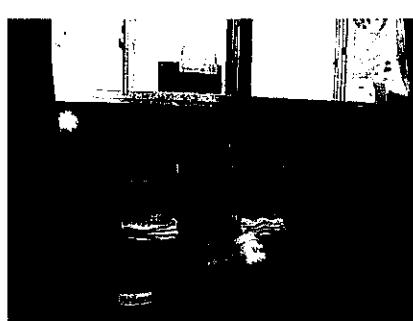
○ワカメ、カキなどの養殖をおこなっていたのが全部流された。昨年11月カキの種付けを行った。今年は、ワカメがとれそう。(70代男性)

○足湯をすると夜よく眠れる。手足の先が温かくなるからいいんだよ(60代男性)

○昨日足がつっちゃって眠れなかつたんだよ。皆、「絆」「絆」っていうけれどがれきは受け入れないんだよね。明日は我が身なんだから助け合わなくちゃ。静岡がれき受け入れるらしいね。(50代女性)

○極楽だー。温泉に入ってるみたい。(児童)

○私は大正生まれでね。手が冷たいでしょう?足湯が気持ち良くて眠たくなってきちゃつたわ。(90代女性)



(「ボランティア情報静岡」2012年1、2月合併号より)

今、伝えたい

~仮設住宅応援ボランティア 見えたこと、感じたこと、考えたこと~



忘れないよ

平木 達美 (第31次隊・静岡市)



新しい年が、全ての皆さんにとって、希望の持てる“福光”(復興)の年となりますよう、お祈り申し上げます。

東日本大震災の震源が宮城県沖。10代の頃、宮城县に住んでいた私は、中学・高校時代に過ごした仲

間の安否に、大変心を痛めました。何か私にできることはないのかと、いろいろ調べた所、ガレキ撤去が大半でした。力仕事はできそうにない・・・と紋々としていた所、近所の青年が県ボラのバスで行ってきたと聞き、「人生観も変わると、是非行った方が良い」との後押しもあり、10日間の仮設支援のボランティアに参加しました。

「こんにちは～。遠野まごころネットです」

「・・・・」

「きょうは、チューリップの球根をお持ちしたので、よかつたらどうぞ植えてください。」

「ありがとう。花大好きなんだー。春が楽しみさ。」

と、花の球根を介して、ほんの少しおしゃべりしたり・・・。また81歳のご婦人は、「あの日はねえ、波がすぐそこまで来て、86歳のじいちゃんを必死で逃げたんだ。どこからどうして逃げたか、全然覚えていないよ。」と目に涙をためて、誰かに話さずにはいられない方。「この仮設には、友達も知り合いもいなくて、一人ぼっちだから、あんた達、泊まっていってけろー!」と心から訴える80代のご婦人。美容室の看板が残り、仮設商店街で、再開しようと頑張っている美容師さん。小さな子供さんのいるお宅では、キャラクターグッズを飾り、「こうでもしないとねえ~」と子育て奮闘中のママさん。など。

お会いした方々、お一人お一人に、かける言葉もない私の無力さに、反って被災された皆さんの東北魂とでもいうのでしょうか、芯の強さを教えられました。本当に貴重な体験をさせていただきました。

“孤独の死”をなくそうと仮設住宅支援チームが立ち上りましたが、どなたか“孤独の生”的支援を訴えていらっしゃいました。報道等では、皆がつながっているかの様に見えますが、現実に仮設で生活している方々に、私は、いつまでも、「忘れていないよー。大丈夫だよー。」と何度も何度も声を届けていかなければならないと思います。出来る人から 顔晴(がんば)ろう!

触れ合いの中で見た強さ

荒巻 真理子 (第31次隊・三島市)



仮設住宅応援ボランティアへ行きました。被災された方達と触れ合った10日間は、貴重で大切な時間でした。瓦礫の撤去や住宅の片づけ等の作業は何度か参加していましたが、仮設住宅へ訪問したのは初めて。そこではたくさんの出逢い、そしてたくさんの記憶がありました。

地震によるショックで亡くなってしまった祖母を抱え必死で津波から逃れた青年。津波の音を聞いて以来、水洗トイレを流せなくなってしまった幼い女の子。飼っていた犬が流されてしまったおじいちゃん。

仮設住宅での生活も大変そうでした。買い物ができる市街地から余りにも遠く離れた場所に建つ仮設住宅での暮らし、バスの本数もかなり少ない。元々広い家に住んでいた方が多いこの地域、仮設住宅の四畳半の部屋はとても窮屈そうでした。

また、住居の貸与期間は2年とされており、その後の暮らしに不安を感じている方多くありました。

話をしてくれた方、それぞれ皆が、震災と闘っていました。

聞くたびに胸が詰まる思いでしたが、話をしていく一番強く感じた事は、それでも皆、悲観的なばかりではないということ。今と向き合い、自分達なりに進もうとしていたことです。

大槌では被災した地元の方達が復興食堂を開店させていたり、釜石でも仮設商店街が出来ていたり、津波で何も無くなった土地でカフェを始めた家族もいて。復興に向けて歩き出す、人間の強さを感じました。

それぞれ色々な事情と思いを抱えながら、それでも顔をくちやくちやにして笑ってくれました。

なんだかこちらがパワーを貰った気がしたよ。こんなに頑張ってるんだもん、私達ももっと頑張らなきゃ。と素直に思いました。

風化して場合じゃない、まだまだこれから。

2012年が始まり、皆が口を揃えて「今年は良い年になればいいな」と言います。

良くなればいいな、復興するといいな。でもそうじゃない。良い年にするのも復興させるのも私達次第。他人事じゃなく、自分の事として。

被災地の笑顔のために、今後も自分なりの支援を続けたいと思いました。

健気さに感動

中野 菊乃 (第34次隊・静岡市)



11月24日から12月4日までの第34次隊に参加させていただき、大槌町の仮設住宅を中心に生活支援のボランティアを続けている「大槌生活支援チーム」に同行しました。九月に二泊三日で参加した旅行社主催の被災地支援のボランティアに参加した時の印象と大きく異なるものでした。

一言で表現するなら、私に何かのお手伝いが出来たのではなく、岩手の方々から多くの事を教えられ励まされて帰郷したという事です。

遠野から釜石への峠を越えると凄まじい被災地です。映像や写真で見たものとは違ひ言葉もありませんでした。

吉里吉里の民家を借り上げて春から被災者の支援に当たり、孤立化しないよう主にメンタル面のサポートを心掛けている生活支援チームの方と二人一組で仮設住宅を回りました。仮設住宅はテレビで見ていた物よりも住みにくそうです。海から遠い高い所にあるため、道は狭く交通事情や利便性は最悪です。その上風向き等の配慮は不可能らしく入口を開けると冷たい北風がもろに吹き込むというお宅も多くありました。私が驚き大変感動したことは、ここにお住いの方々の健気さです。困っていることはないかとの問い合わせに「皆さんに助けてもらい親切にしていただき、雨風凌げる所に入れてもらい大丈夫です。ありがとうございます」「天災で誰を恨むわけにもいきません。みなさんに助けていただきながら自分でやっていくしかありません。今は取りあえず足りています。ありがとうございます」という言葉が返ってくるのです。そして支援物資の手編みの帽子に付けられていました『お寒くなります。風邪をひかないように気を付けて、頑張りすぎないように頑張ってください。』の一筆箋をご覧になって「こんなにしてもらってありがたいことです。」とおっしゃるのです。よくよくお話をするとご主人も家も流されたとかご家族がまだ行方不明だとかいう方々です。あの大震災からまだ八ヶ月です。

日常の些細な事に悩んだり腹を立てている自分がとても恥ずかしくなり、逆に背中を押されて帰ってきました。今後は長い歳月現地を忘れることなく様々な方法でのお手伝いを続けたいと痛感しました。

最後に静岡県ボランティア協会のまごころ寮のお蔭で日本一快適な活動ができたことを感謝します。



小さな一歩

矢野 軟美 (第34次隊・静岡市)

今回、大船渡のお茶っこ隊に参加させていただきました。仮設住宅を回り住民の方を招いてお茶会を開く活動です。

お茶っこを開くとすぐ皆さんが駆けつけてくれます。毎回楽しみにしているお母さん、お父さん、郷土料理を持参してくれたおばあちゃん、手芸が得意で作品を持ってきてくれる方など素敵なおばかりで、お茶っここの活動は多くの笑顔であふれていました。

和気藹々とした中ふとした瞬間に震災当時の話をしてくれる方もいました。津波がどれほど恐ろしいのか、どれほど生活が変わったのかが伝わってきました。

しかし辛い話の中にも希望を感じることがありました。元漁師の女性は体が随分楽になり、「漁師だったころよりも長生きできそうだわ。前向きに生きていかなくちゃね。」とおっしゃっていました。他にもパン屋再建に向け一歩を踏み出した方や、震災後に新しい趣味や新しい友人を見つけ毎日生き生きと暮らしている方にたくさん出会いました。お手伝いに行ったはずが、反対に元気と勇気をいただいた活動でした。

ボランティアに参加して感じたことは、小さな一歩が大きな成果を生み出しているということです。一人の力はとても小さく、自分自身も今回の活動の中で何度も不甲斐なさを感じました。自分ひとりでは何も変えられないことを痛感したからです。しかし沿岸部の被災地は震災当初から考えられないほど変化しています。仮説店舗での商売が始まったところもあります。今までのボランティアの成果は確実に形になって現れています。東北は一歩ずつ前へ進んでいます。

まだまだ出来ることがたくさんあります。まごころネットで頑張っている人は大勢います。みなさんぜひ東北へ行ってください。観光でも、ボランティアでも理由は何でも良いのです。東北には素晴らしい景色と人の強さがたくさんあります。

活動に参加でき本当によかったですと感じています。受け入れてくださったまごころネットの方にも感謝しています。これからも自分の出来る範囲で東北の応援を続けていきたいと思っています。



ただそばにいること

藤原 祥平 (第35次隊・静岡市／岩手県釜石市出身)

「いっぱい写真集は出てるんだけどね、これが一番いいんだよ」そう言って見せてもらった写真集は多くの人が見たせいか、ところどころページが本からとれかけていて、バラバラにしてしまわないよう気をつけてページをめくっていかなければなりませんでした。陸前高田を写したその写真集には、津波の前の松林の広がるきれいな街が載

っていて、隣で写真の解説をしてくれているおじさんの話を聞きながら、自分がこの日訪れて、自分の目で見た景色とのあまりの違いに信じられない思いました。

僕が仮設住宅応援ボランティアとして参加させてもらった活動は「お茶っこ隊」というもので、仮設に住む人たちを集めて、お茶やお菓子を振る舞い、みんなで楽しく喋ってもらうことで、仮設住宅のコミュニティづくりをお手伝いするというもの。グループを作り毎日違う仮設住宅へ赴いて、そこに住む人を呼び、色んな人の話を聞きました。

そのなかで僕が感じたこと、それはこの活動の大切さでした。1つの集落がそのままみんな同じ仮設に入っている場合もありますが、お互いに誰も知りあいがいない状態の仮設もあります。お茶会に参加してくれる方は皆明るく、暗さや悲しさを感じさせない人がほとんどですが、それはお茶会を通して仲のいい人たちができた結果で、決して最初からそうであったわけではないと思います。本当に多くの方がこのお茶会を楽しみにしてくれていました。

冒頭に書いたのは全体の活動の中でも強く記憶に残っている陸前高田でのことで、写真集を見てくれたおじさんはとても楽しそうに、たくさんのこと話をしてくれました。毎年開かれていたお祭りのこと、陸前高田の学校やお店、海岸と松林、そして津波のこと。僕にはそれらのことを共有することはできません。とても受け止めきれなくてそのことを悲しく思うときもありました。でも、ただそばで話を聞くことが、その人の心の重荷を降ろす手伝いになったのなら、この活動に参加して本当に良かったと思いました。



強く生きる人達

鈴木 友子（第37次隊・浜松市）



東日本大震災から9か月の12月下旬、私は10日間の仮設住宅でのボランティアを終えて、静岡に帰った。最寄りの駅に着くと、そこにはいつもの見慣れた風景が広がっていた。駅には母が迎えに来てくれていて、「おかえり」と私を待ってくれていた。

ごく当たり前のことが本当はとても豊かでかけがえのないこと。この愛しい故郷と家族を、あの女性は一瞬にして失ってしまったのだ。

ある60代の女性のお宅に伺った。その女性は津波で家族を亡くされ、家も失い、今は一人で仮設住宅に暮らしているという。近所と挨拶程度の付き合いはあるが、仮設住宅に移り住んでから初めて出会った人達。皆が心に深い傷を負う中で、一から関係を築いていくことは本当に難しいことのようだ。震災前に近所に住んでいた元々仲の良かった人達は、県外に住む親戚の家で暮らしていたり、遠く離れた仮設住宅に住んでいたりしてめったに会えない。日々の食事は最近できたスーパーの仮店舗で食材を購入しているという。そこからは少し距離があったため、買い物に出かけるのは大変ではないかと聞いたところ、女性は涙を浮かべながら答えてくれた。

「今は一人分だけだから、そんなに重くないから大丈夫。地震の前はね、毎日たくさんの買い物とみんなの食事の支度に嫌だなあ、面倒くさいな、なんて思うこともあったの。でも、今思えばみんな元気に生きていたから出来たことなのにね。」

胸が締め付けられる思いで一杯になった。

その仮設住宅を離れる際、集会所の横の一つのプランターに目が行った。それは先程の女性が秋に球根を植え、大事に育ててきたチューリップだという。ほんの少しだったが、土から芽を出している。冬の冷たい風に吹かれ、雪に覆われながらも命を輝かせ、まるで「頑張って生きているよ」と伝えているようだった。その一生懸命な姿があの女性をはじめ、東北の方々の強さと重なって見えた。どうか春には沢山の花を咲かせて欲しい。そして、花が咲く頃には、少しずつでも今よりも沢山の人々の笑顔が見ることのできる日本になっていて欲しいと強く思った。



6. 「仮設住宅の被災者に静岡の“みかん”を贈る運動」

仮設住宅で生活されている被災者の方々に、“静岡のみかん”をクリスマスプレゼントとしてお届けする取り組みを実施しました。広く市民に協力を呼びかけ、82件（個人・団体）の皆様よりご提供いただいたミカンを、岩手県遠野市の「NPO法人遠野まごころネット（遠野被災地支援ボランティアネットワーク）」主催のクリスマスイベント「サンタが100人やってきた」プロジェクトに参加した静岡の災害ボランティア第38次隊の皆さんのが、仮設住宅を一軒一軒訪問し、お届けさせていただきました。

呼びかけ期間：

11月25日（金）～12月20日（火）

協力者：82件

提供量：1,071箱

お届け先：

大船渡市、陸前高田市、大槌町の仮設住宅に暮らす方々、集会所やグループホーム



大船渡市のSさんより、お礼のお手紙をいただきました。

前略

12月23日、大船渡市盛駅三鉄ホームにおきまして、遠野まごころネットの皆様よりみかんを頂戴いたしました。静岡からわざわざ私どものためにというお心に只々感謝申し上げます。

「私たちこれからも皆さんと共にあり続けたいと思います」というメッセージも同封されており、大変心強くうれしくなり一筆した次第です。ありがとうございます。

「心は見えないけれど、心づかいは見える。思ひは見えないけれど、思いやりは見える。やさしい思いがやさしい行為となった時、心は初めて生きる。心が生きることは、人間が生きることだ」

テレビCMではないですが、被災者となり学ぶことの多い一年でした。

7. 震災から1年 3月11日

①復興への願いを込めてボランティアバス「しづおかつながり隊」派遣

亡くなられた方々のご冥福を祈るとともに、この震災を忘れることなく、これからも地元に暮らす方々に思いを寄せ、つながっていくことを目的に、ボランティアバスを派遣しました。

日 程：3月9日（金）夜出発～3月12日（月）朝 静岡着
 活動内容：遠野まごころ寮を拠点に、大槌町赤浜地区で側溝の清掃
 陸前高田市「慰靈祭」に参加・協力
 参加者数：29名（事務局1名同行）



②復興への願いを込めて静岡では「しづおかキャンドルナイト」を開催

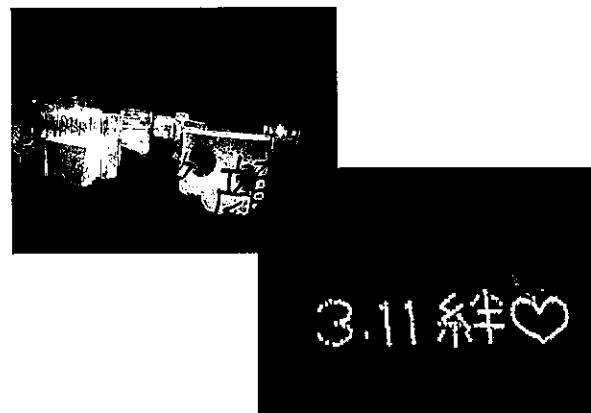
現地に行くことはできないけれど、この震災を忘れることなく、これからも静岡から地元に暮らす方々に思いを寄せ、つながっていくことを目的に「キャンドルナイト」を実施しました。

準備には、近隣の高等学校の生徒や夏にボランティア派遣した高校生らが中心となりペットボトルをつかった燈籠づくりやメッセージボードの作成などを行いました。メッセージボードには「つながる」「共に生きる」といった言葉が書かされました。燈籠にもひとつひとつ言葉が寄せられ、気持ちをひとつにした時間になりました。

日時：3月11日（日）13:30～19:00

会場：静岡県総合社会福祉会館

2階ボランティアビューロー
 いこいの広場



8. 復興支援シンポジウム・講演会の開催

（1）「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」

東日本大震災「静岡県災害ボランティア」派遣計画
 復興支援シンポジウム

「大震災から6か月 復興への道のりに向け、私たちにできることは…」

日 時：9月11日（日）14:00～17:00

会 場：静岡県地震防災センター

内 容：○静岡県災害ボランティア派遣計画取り組み報告

・8月末までに約600名（第1次隊～21次隊）が現地で活動

・8月に24名の高校生が活動

○シンポジウム「復興への道のりに、私たちにできることは…」

○総括 「静岡県災害ボランティア派遣の今後の取り組みと課題」

参加者数：175名（関係者含む）

【シンポジスト】（敬称略）

三村恵子

静岡災害ボランティアとして、4月（第3次）・7月（第15次）・8月（第18次）に、また職場の募集にも参加し、岩手県で活動した。日常よりボランティア活動に参加し、さまざまな声に寄り添っている。



久保田琴

静岡県災害ボランティア第6次隊として5月に参加。その後、8月の「高校生災害ボランティア派遣」に同行し、高校生のよきお姉さんとして、震災を学ぶとともに、「今できること」に動き出した大学4年生。

渡辺日出夫（アドラー・ジャパン国内事業担当）

アドラー・ジャパンは、世界120か国に支部を持つ世界有数のネットワーク型NPO法人。アフリカのスーダンやアフガニスタン等で活動する。阪神淡路大震災以降、国内災害の被災者支援に携わり、今回の震災では直後から宮城県に入って、関係者との調整にあたり、活動を開始した。

松山文紀（日本財団ROADプロジェクト担当）

日本財団ROADプロジェクト担当として、被災地支援に関わるNPO団体の支援調整にあたる。また東海地震等に備え、静岡県内外の災害ボランティアの広域連携の仕組み構築を目指す、ネットワークづくりに携わっている。

小川英雄（静岡県危機管理監代理兼危機管理部理事）

岩手県大槌町・山田町で行政支援を行う静岡県の先遣隊として、3月に現地入りし、被災した町行政の支援活動サポートを考える役割を担った。

【コーディネーター】

鳥羽茂（静岡県ボランティア協会事務局長）

支援活動を行うため、3月14日より福島県や岩手県に調整に入り、遠野を拠点としてボランティア活動の準備にあたった。顔の見える関係を大切に、一人ひとりとの関わりを大切に活動を続けている。

(「ボランティア情報静岡」2011年10月号より抜粋)

3月11日に発生した東日本大震災から9月11日で6か月が経過しました。

本協会は、これまで取り組んできたボランティア活動を振り返り、これから続していく長い復興への道のりに向けて私たちにできることは何かを考えるため、また復興支援の機運を風化させることがないよう支援活動を繋いでいくために、復興支援シンポジウムを開催しました。

前半の取り組み報告の紹介に続き、後半では私たちにできることは何かを考えました。

被災地支援ボランティアや支援活動を続けるNPOスタッフらが語った「これから道のりに向け、できること」をご紹介します。

(本特集はシンポジストの発言を事務局が要約しました)

心の寄り添い (三村恵子)



これから私たちが出来ることというのは、やはり心の部分だと思います。ハード的なものが少しずつ前に進んでいく中、日を追って重くのしかかってくるのが心の部分だと思うんです。ましてや冬に向かい、避難所から仮設住宅に移って、個の空間での生活になり、閉じこもっていく心配がたくさんあると思います。毎日でなくとも、誰かがきてくれる、声をかけてくれる、そういう支援を長く続けていくことが私たちに出来ることなのではないでしょうか。

それともうひとつは地元のことです。東海地震もそうですが、この前の台風ではわたしの暮らす地域でも床下浸水があり、23軒が集まって避難をしたら非常用の食料がないということがありました。自分の足元、自治体に帰って、地区的の防災において、考えられないことが実際起こるということ。津波がこななくとも、山津波っていうものがある。そういうことを地域の人たちがみんなで考えなおすということも体験を活かしていくことだと思っています。

伝える・参加する (久保田 琴)



まず自分が体験したこと、感じたことを確実に誰かに伝えていくことです。テレビや新聞で見た情報だけではどうしても足りないし想像できない部分も多いと思います。現地に行って感じることが、はるかに多かったので、それを静岡に帰り、友人や家族、会う人たちと、話し合う場を心がけて持つようにしてきました。自分が伝えられることを伝えていくこと、そこから伝えた人たちが、何を感じたのかをまた自分が聞くことで実際の活動につなげていけるのではないかと思いました。

次に、防災訓練、避難訓練に積極的に参加していくことがとても重要だと感じました。高校生と一緒に訪ねた8月、大槌保育園の八木澤園長先生が、保育園の園児たちは日頃から訓練を重ねていたため実際に津波がきて避難するよ、

と言った時にとてもスムーズに避難することができたそうです。やはり日頃の訓練の積み重ねだとお話を下さいました。先月、私は、初めて富士市の総合防災訓練に参加させていただきました。そこでは中学生と一緒にHUGという避難所運営ゲームを通して、実際にどんな方が避難してくるのか、例えば障がいをお持ちの方だったり、高齢の方だったり、子どもがいらっしゃる方たちをどのように避難所に振り分けていくのかなどを考え、ゲームを通して震災の怖さや自分たちが携わらなければいけないという意識を持つことができました。大人だけではなくて地域全体を巻き込んで訓練したり、互いに気を遣いあっていくことが大切なのかな、と思いました。

現地には“復興への縁”という、大きい横断幕がありました。現地で出会った方も、一緒にボランティアを行った方々もホントに出会いだと思うので“縁”や“出会い”を忘れずに、何年も何十年先も心から復興出来るようになるまで私は想いを寄せながら、今自分に出来ることは何なのかを、まわりの人たちと話しあいながら、実行出来ることからやっていきたいと思います。

コミュニティ支援・仕事づくり (渡辺日出夫)

復興への道のりには、通過のポイントがあると思います。ひとつはコミュニティ支援をどう行うか。自治会を作った、自治体ができたとかありますが、やはり向こう3軒両隣の関係がコミュニティ作りの基本だと思っています。いまだに仮設の中では、隣に誰が住んでいるかわからないという声も聞いています。まず両隣を知りましょう、そして自分の棟を知りましょうという形で、一番小さな単位からやっていけばコミュニティ作りは自然とできあがってきます。まず会長決めましょう、となると決まらない。そういったサポートをしていくことが復興への第一歩につながるのでは、と思っています。

次に、生きがいづくり、仕事づくりです。山元町はいちごが名産なのですが、イチゴ農家の方が亡くなったり、津波でハウスがなくなったりして、もう一回やろうという農家の方は1割だけです。9割の方はもうやめると言っています。そういう状態で仕事をどう創出するか、高齢になっているで非常に難しい。だから仕事というより生きがいづくりです。趣味や自分の培ってきた経験をいかして誰かに伝えていくとか、直接支援にはつながらないかもしれないですが生きがいを見い出すことによって、家から出よう、人と会って話そう、ということになると思います。

また、平時からのつながりが非常に大事です。私も、3月11日にして行きましたけれど、宮城県になぜすぐ行けたかというと平時からつながって顔も見える方々がいたからです。県や市の社会福祉協議会、また政府の現地対策本部などの方々とつながりが持てて、情報収集もできる。向こうも、「あつ、この人なら大丈夫」と思って受け入れてくれます。

これらが、NPOとして今後の復興への道のりや広域における迅速かつ的確な支援を考える上で大事だと思っています。

あと、今後復興に向けて私がお願いしたいこと。もう物を送る支援はやめませんか。現地は、ある程度物流は復活しています。現地で物を買うことで、現地の経済がまわり、彼らの仕事づくりにもつながります。

最後の一人まで (松山文紀)

緊急支援の段階が終わり、生活支援の段階になつてきたので、何か協力するのであれば人数頭数ではなくて内容を考えてほしいです。現地のためになること、現地でお金が落ちる仕組みをどんどん工夫していくかといけない。一NPOでも一個人でも、そういった動きを隣の市町、さらに大きく県単位で見ていく。たとえば、福島から岩手県の〇〇の自治体・NPOの動きをみると、ああおもしろい動きをやっているなというのがあれば、情報の共有が出来る場をどんどんもっていく。自分たちのところでなんとかならないことは、「こんな事例で対応しているところありませんか」と聞く。いろんな情報を集める、また対応事例をどんどん出していくことが非常に有効ではないかと思います。

そして私たちは“最後の一人を見逃さない”を合言葉にやっています。戸数の多い仮設から入ってイベントをやったりすると、何人きてくれたという成果をどうしてもみてしまうんですが、声をあげられない人が絶対いるという観点を忘れてはいけません。16年前の阪神・淡路大震災と同じことを繰り返してはいけないと肝に命じて、広域の連携に繋げていけば、なにかしら出来ることがあるだろうと考えています。

そして静岡だからこそ、次に静岡に起こるであろう災害への備え、観点も決して忘れてはいけないと思います。そのなかで一人一人に出来ることは、「忘れないこと」だと思います。これまでの被災地の方々が常々言われるのは、「忘れられることが一番悲しい」ということです。1年とか2年とかそういう区切りの時は報道がありますが、メディアの報道は減り、人々の関心も薄れます。忘れられることが一番悲しい。渡辺さんが言っていたように、お茶を飲みに行くだけでものすごい支援になるんです。物じゃなくて、金じゃなくて、心なんです。

「…だから」でなく (小川英雄)

岩手県内は全ての避難所が閉鎖され仮設住宅での生活がはじまりました。しかし、それぞれの行政がどこまで心遣いができているのかな、という部分があります。阪神淡路大震災の反省にたち、例えば山田町では仮設住宅にコミュニティ単位で移るようになっています。だから日頃見ていた顔には会える状況を作ったといえます。しかし、もっと大事なことがあります。「仕事はどうするんだ」「買い物に困らないような仕組みをど



うやって作っていくんだ」。これがなかなか苦労しているようです。渡辺さんのお話にも、外で物を買って持っていくんじゃないという話がありましたが、行政でも取り組んでいます。山田町で「避難所で扇風機が欲しい」という話がありました。現地調達できないかと考え、商工会を通じて、店を津波で流されてしまった電気屋さんを紹介いただき、そこから扇風機を買い求め、設置しました。

もう一つ、買い物、仕事、日常生活に加え、会話があつて気持ちが通って、そこで笑い声が聞こえるような仕組みができないか、という発想がやはり行政にまだまだ足りないのかと思います。いろいろ知恵を絞ることが大事です。

黄色いハンカチ作戦というのがあります。防災訓練のときに大丈夫だったら黄色いハンカチを外に出し、出てなかつたら、声をかけないといけないというものです。それを例えば毎月1のつく日にやってみようとか、毎週月曜にやってみようとか…。そうすると、「おまえんとこ出し忘れてるぞ」と声かけが出来る、そんな仕組みを作ったり、あるいはお世話おばちゃんとか、お世話おじいちゃんなど命名をするような工夫を行政は出来るんではないか、と考えます。

今までやったことがある、なしに関わらず、またこれは行政の役割じゃない、あるいはボランティアの役割じゃない、とか言はずに、とにかく、どうしたら、明るい会話があつて、笑顔があふれるような避難生活が出来るか、という視点から、いろんな試みをすることが大事です。どうしたら出来るのかという発想でこれから私たちも取り組んでいきたいと思います。

おわりに・・・ (鳥羽 茂)

ボランティアの役割として、人と人とのつなぎ、引き合わせていくこと、きめ細かな関係性をつくることがより大切になってきました。そして、「いつまでも忘れない」こと、何度も何度も行き、「また来たのか」って言われてしまうくらいに、人と人のつながりをずっと築いていく、そんなことも大事にしていただけたらと思っています。



(2) 「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」

東日本大震災「静岡県災害ボランティア」派遣計画
講演会

岩手県おおつち保育園でこどもたちの命を守ったお話

日時：11月12日（土）16:00～17:45

会場：静岡市役所・静岡庁舎17階会議室

内容：お話「岩手県おおつち保育園でこどもたちの命を守ったお話」

ゲスト 八木澤弓美子さん（岩手県・おおつち保育園園長）

参加者数：160名（関係者含む）

9. 相談対応

震災直後より、本協会では「何かできることはないだろうか」という様々なご相談を受けてきました。「現地に行きたい」「現地に行くことはできないが、静岡でできることはないだろうか」—多くの方の思いをお聞きし、被災地支援につなげてきました。

■学校応援プロジェクトー被災地の学校に机と椅子を贈る活動

静岡学園中・高等学校の校舎移転に伴い全面更新する机と椅子を役立てることができないかとの相談を受けました。そこで、岩手県教育委員会（大槌町教育委員会・陸前高田市教育委員会）・福島県教育委員会の要望に基づき被災した中学校・高等学校へ、机と椅子を贈る活動を実施しました。

本協会は岩手県遠野市を拠点に遠野まごころネットと連携・活動する中で、現地の様子を見聞きし、教育関係者に会う機会がありました。とくに陸前高田市や大槌町では、卒業式をまじかに控えながら、卒業証書や卒業アルバムが流されてしまった学校、また新たに新入生を迎える準備もできずにいた学校もありました。そして家を流され、避難所で暮らす生徒たちにとって、学校は友達に会い、ともに学べる場であり、子どもたちの心を支えるために大切な場所でした。

また福島県では、福島県内で活動するNPO関係者より震災翌日から支援要請の連絡が入っており、原発圏内より避難している生徒たちの暮らしを聞く機会がありました。

被災地の子どもたちに使ってもらうために、事前に使える状態の机・椅子であるかを確認し汚れを落としたり、現地に運ぶために机・椅子のトラックに積み込む作業は、静岡学園中・高等学校の生徒たち自らが行いました。

静岡学園高校さんとともにプロジェクトに取り組む中で、不安が交錯する被災地の生徒たちが、少しでも安心して学校に通い学ぶための環境づくりを応援することができました。そして、静岡から何かできることをしたいと願った静岡学園の生徒たちの思いとエネルギーが机や椅子とともに現地に届けられ、学校で子どもたちの笑顔がたくさん生まれる第一歩となりました。

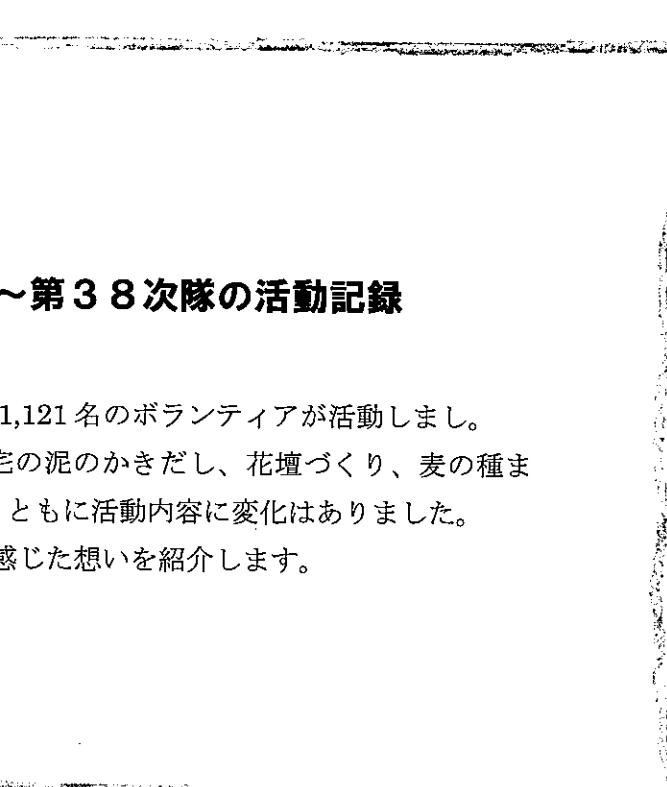
取り組み期間：平成23年4月2日～5月13日

届け先：岩手県（大槌町）吉里吉里中学校・大槌中学校・大槌町中央公民館
(陸前高田市) (矢作中学校気付) 気仙中学校・陸前高田市仮庁舎
(遠野市) 遠野災害ボランティア支援センター
福島県（福島市）福島明成高等学校・福島西高等学校・福島南高等学校・
福島北高等学校
(二本松市) 安達高等学校・安達東高等学校
(河沼郡会津坂下町) 坂下高等学校・会津農林高等学校
(取麻郡猪苗代町) 猪苗代高等学校
(いわき市) 磐城高等学校・磐城桜が丘高等学校・いわき海星高等学校



第1次隊～第38次隊の活動記録

4月から12月までに1,121名のボランティアが活動しました。
ガレキの撤去、個人宅の泥のかきだし、花壇づくり、麦の種まき・・・。時間の流れとともに活動内容に変化がありました。
38隊の活動、そして感じた想いを紹介します。



第1次隊（4月7日～11日）

先遣隊として派遣。現地宿泊拠点「まごころ寮」開所式に参加
被災地数ヶ所をバスで視察、現状の把握
陸前高田市、高田小学校のゴミ除去と体育館の土砂撤去活動
高田小学校の花壇の整備活動



第2次隊（4月14日～18日）

第1次隊に引き続き、
陸前高田市、高田小学校のゴミ除去と体育館の土砂撤去活動
高田小学校への支援物資の搬入のお手伝い
高田一中（避難所）での物資配布のお手伝い
個人のお宅の清掃お手伝い



第3次隊（4月21日～25日）

陸前高田市気仙町の秋刀魚、鮭、イクラの回収撤去活動
個人のお宅のガレキ撤去活動
大槌町の家屋の土砂かき出し活動
遠野まごころネットでの支援物資の整理・仕分け活動



第4次隊（4月28日～5月1日）

陸前高田市気仙町の秋刀魚、鮭、イクラの回収撤去活動
高田小学校のグランド整備活動
大槌町の家屋の土砂かき出し活動
大槌町の仮設テント設置活動



参加者の声「活動を通じて考えたこと。感じたこと」

- 作業の一つ一つは、とても細かかったことのように思えることもあるが、実はとても大切な作業だったことに気づかされた。
- 街の惨状を見るに、復興にはどの位の時間が必要か全く見当もつかないが、とりあえず自分のやった事が少しでも被災者の役に立てば良いなと思いました。
- 拭いても拭いてもしみ出してくる床下の泥、拾っても拾っても出てくる校庭のガラス片。いたる所そんな状況かもしれないけれど、先は長く遠いかもしないけど、一歩ずつ、少しずつ復興へ向かっているのだと確信しました。どんな小さな力でも、その一歩の役に立つと。
- どんなに小さな作業でも必要とされていて、必ず復興に繋がると信じてやりきる思いが必要だと思いました。
- 全体の少ししかできない仕事も、多くの人が繰り返し行えば進むであろう。

第5次隊（5月5日～5月9日）

大槌町のおおつち保育園のドロかき出し・園庭清掃活動
釜石市の仮設住宅への物資運び入れ活動



第6次隊（5月12日～5月16日）

陸前高田市米崎地区の住宅の床下ドロかき出しと庭の整備活動
大槌町桜木地区の側溝のドロかき出し活動
大槌町小鎌地区の住宅前の土砂片付け、
土のう袋集積場所の整備活動



第7次隊（5月19日～5月23日）

陸前高田市米崎地区の田畠のガレキ撤去活動
大槌町の住宅のガレキやドロの撤去、
まごころ広場でのイベントの手伝い



第8次隊（5月26日～5月30日）

大槌町のおおつち保育園移転地の除草活動
陸前高田市中田・米崎地区の避難所、仮設住宅の聞き取り調査
遠野災害ボランティア支援センターの倉庫整理、周辺の清掃活動



参加者の声「活動を通じて考えたこと。感じたこと」

- 大量の土砂やガレキがまだ手付かずで残っており、まだまだ支援の手が必要だと思いました。
- ボランティアの受入れ態勢がしっかりしており、初めての参加者でも不安なく活動ができました。
- ボランティア活動することによって防災意識が実質高まる。
- 被災された方の気持ちを思うとつらかったですが、明るく「ありがとう」「ご苦労様」と言われてうれしかったです。
- 自分自身にできることは何と小さなことなのだろうと当初は思った。しかし、チームで取り組む中で一人一人の力を合わせていくことの必要性とどんなに小さなことでもその先へと繋がっていくことを強く感じた。
- 1人の力ではどうにもならないが、皆で協力すれば可能である。人間の力というものは、すごいと思いました。

第9次隊（6月2日～6月6日）

大槌町小鎌地区の側溝清掃活動、個人宅のドロかき出し活動



第10次隊（6月9日～6月13日）

大槌町小鎌地区の側溝清掃活動、

大槌町桜木地区の小鎌川河原のガレキ撤去活動

陸前高田市米崎地区の三陸鉄道線路脇の清掃活動

第11次隊（6月16日～6月20日）

陸前高田市米崎地区の個人宅ガレキ撤去活動、
ガラス片回収活動

大槌町の大槌川河川清掃活動

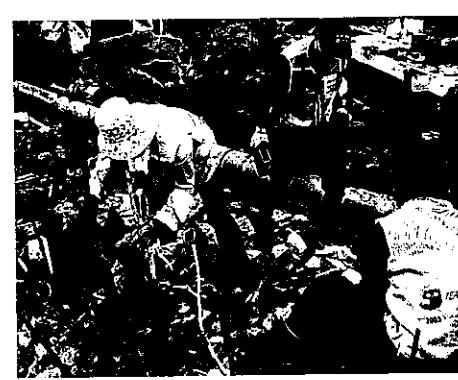
大槌町桜木地区の個人宅の家財、ガレキのトラック積込活動



第12次隊（6月23日～6月27日）

陸前高田市米崎地区の個人宅基礎木材撤去活動、
ガラス片回収活動

大槌町の大槌川河川清掃活動「菜の花プロジェクト」



参加者の声「活動を通じて考えたこと。感じたこと」

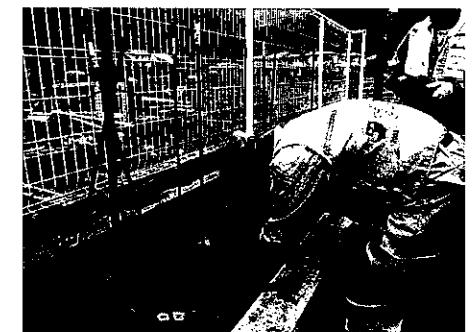
- 今までボランティア活動に特に興味なく、自分から遠い存在でした。しかし、今回の大震災はとても大きなショックを受け、自分で出来ることを少しでもお手伝いしたいという気持ちになりました。
- 自分の力の小ささを改めて感じました。しかし小さな力も皆で力を合わせることで、少しずつ復興に向けてのお役に立てるのだと思いました。
- 寄り添うということについて考えました。
- ボランティアの行動一つで、被災された方の心を癒したり、傷を深くする事もあるので頑張ることも大切だけど、頑張りすぎないのもボランティアのつとめだと思いました。
- 全国各地から集まったボランティア仲間の活動を見て、「負けないぞ岩手」、少しずつでも復興にむけ進んでいけると感じました。
- ガレキの撤去作業中、写真や服、生活用品が出てきて、全く知らない方の生活や人生に触れている気がして切くなりました。
- 災害（被害）の規模が大きすぎ、継続的な支援の必要性を感じた。
- これからも何らかの形で東北復興に関わり続けたいと思います。

第13次隊（6月30日～7月4日）

大槌町おおつち保育園の花壇整備、野菜の植えつけ活動

陸前高田市米崎地区のガレキ撤去活動

陸前高田市上長部地区のガレキ撤去活動



第14次隊（7月7日～7月11日）

陸前高田市のガレキ撤去活動、「ひまわりプロジェクト」

大槌町の小鎌川河原清掃活動



第15次隊（7月14日～7月18日）

陸前高田市のガレキ撤去活動

大槌町の小鎌川河原清掃活動



第16次隊（7月21日～7月25日）

陸前高田市上長部地区のガレキ撤去活動

大槌町小鎌川の河原清掃活動

大槌町桜木地区の家屋の庭整備活動



参加者の声「活動を通じて考えたこと。感じたこと」

- テレビで見るより、現地はひどくとても言葉にできないくらいだった。しかし、現地の人たちは前に進もうと頑張っている姿に勇気づけられた。
- 若い人が多くうれしかった。
- 周囲の人に伝えて少しでも協力ができるようにこれからも自分自身頑張っていきたいです。当たり前のことが本当に幸せなことだと思いました。
- まだまだ復興などという言葉は使えない気持ちになりました。
- 小さな事でもコツコツとやるしかない。でもそれが大勢でやれば大きな事になるはずと信じている。
- 自然の恐ろしさを感じた。一人一人の力が合わさると大きな力になることを実感した。
- 外国のボランティアの方や聴覚の障害のある方もボランティアに来ていてすごいと感じました。
- 重機が対応できないところにボランティアの必要性を感じた。
- 私たちができることはまだまだ山ほどあるのだと感じました。
- 被災した方の話を聞いて本当に寄り添っていきたい、助けが必要な所へ手をさしのべたいと思った。
- 個人が特定できる物がでてきた時は切なくなりました。

第17次隊（7月28日～8月1日）

陸前高田市上長部地区の畠内ガレキ撤去活動
遠野まごころネットでの支援物資の仕分け活動・炊き出し



第18次隊（8月4日～8月8日）

大槌町の寺院での墓地土砂かきだし活動



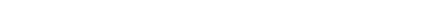
第19次隊（8月11日～8月15日）

大槌町の寺院での墓地土砂かきだし活動
大槌町吉里吉里地区の花壇水やりと除草活動
大槌町の保育園清掃活動
まごころ広場の支援物資仕分け活動



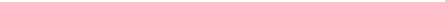
第20次隊（8月18日～8月22日）

陸前高田市気仙町のガレキ撤去活動
大槌町の駐車場整備活動



第21次隊（8月25日～8月29日）

陸前高田市気仙町のガレキ撤去活動
大槌町赤浜地区の駐車場整備活動



参加者の声「活動を通じて考えたこと。感じたこと」

- 活動を通して被災地の現状、被災者の心情が少しでも理解できたのかなと感じます。また、現地で復興のために力を尽くしておられる方々や全国の方々の思いも知ることができました。
- 「まだまだ足りない」「もっと何かできるはず」という今回感じた思いを必ずこれからの自分の行動につなげていきたいと思います。
- 自分でどれだけやるか、というより皆でどう一緒にやるかが大切だと考えるようになりました。
- ちょうどニーズの転換期にきているのではないかと感じました。
- 職場に帰ってどう伝えようか、どのように活動し、みんなを巻き込んでいこうかなと思いました。
- 被災者の心になりきること、自然そのものを本当に知ることはとても難しい。しかし現地に来て活動し、その事にほんの少し近づけたかなと感じた。
- 復旧・復興には機械や道具も必要だが、人が一番必要だと分かりました。
- ボランティア活動ができなくても、その土地の物を買うことや、旅行に行くこと、興味や関心を失わずにいることだけでも立派な支援になると感じた。
- 今までボランティア活動に参加したことがなく、自分からは遠い存在でした。今回の震災はそんな自分でも何かできないかと考えさせられ、個人では小さな力でも皆で力を合わせれば役に立てるのだと思いました。

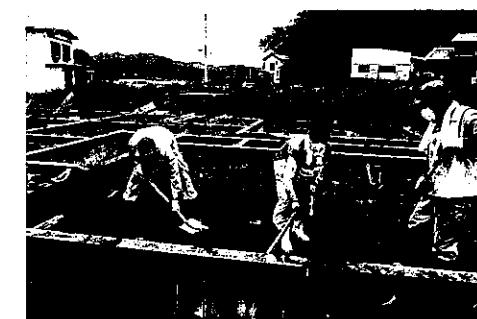
第22次隊（9月1日～9月5日）

※台風12号の影響で3日間活動中止
被災地視察（大槌町～陸前高田市～大船渡市）
遠野市の郷土見学
まごころ寮の清掃活動



第23次隊（9月8日～9月12日）

陸前高田市小泉地区の農業用水路ドロかき出し活動
大槌町赤浜地区の家屋ガラス片回収、ガレキ撤去活動
釜石市箱崎地区の家屋ガレキ撤去活動



第24次隊（9月15日～9月19日）

陸前高田市高田町の側溝清掃活動、ガレキ撤去活動
大槌町赤浜地区の個人宅跡のガレキ撤去活動、草取り



第25次隊（9月22日～9月26日）

釜石市箱崎地区の個人宅ガレキ撤去活動
陸前高田市松峰地区の水田のガレキ撤去活動
大槌町赤浜地区の民宿床剥ぎ・解体活動



参加者の声「活動を通じて考えたこと。感じたこと」

- 現地での活動ができなかつたのが残念だったが、前回訪問からの変化の有無を確認できてよかったです。
- 待つこともとても大切なことだと感じた。
- 「被災された方のご自宅をできるだけキレイにして被災者の方に寄り添う」という言葉で、活動の意味が実感として感じ、満足感も得られました。
- 前回の時より細かい作業が中心になっていると感じ、その分、そこに住んでおられた方々のことを考えるようになった。
- メディアの扱いは日々少なくなっているが、まだまだ多くのボランティアの力が必要。
- ガレキの撤去や土砂のかきだし終われば終了ではない。その後に、自分に何ができるかが大切だと思いました。
- 震災の傷跡がまだまだ残っていて、絶対に風化させてはいけないと思いました。長い道のりだと思いますが、できることから進めていきたいと思います。
- テレビでしか見ることのなかった現地に、実際に自分の足で踏み入れて、肌で風を感じて活動することにより、被災の大きさを痛感しました。また、ボランティアの方々とご一緒に、現地の方々と触れあい、人と人との繋がりを改めて感じる事ができました。

第26次隊（9月29日～10月3日）

大槌町赤浜地区のガレキ撤去活動、花壇整備・種まき活動



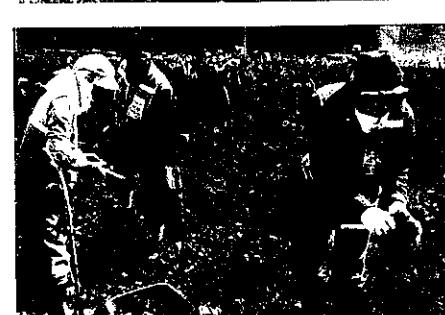
第27次隊（10月6日～10月10日）

陸前高田市気仙町上長部地区の畑のガラス片、小石回収活動
大槌町赤浜地区の稻荷神社の参道清掃活動、側溝清掃活動



第28次隊（10月13日～10月17日）

陸前高田市気仙町上長部地区の畑の石拾い、種採り活動
大槌町赤浜地区のガレキ撤去活動
釜石市箱崎地区の道路清掃活動、側溝のドロ出し活動



第29次隊（10月20日～10月24日）

陸前高田市上長部地区の菜種、麦の種まき活動
大槌町赤浜地区のガレキ撤去活動
釜石市箱崎地区の道路の清掃活動、漁師体験



第30次隊（10月27日～10月31日）

陸前高田市上長部地区のガレキ撤去活動
大槌町赤浜地区の側溝清掃活動
大槌町小鎌地区の麦種まき活動



参加者の声「活動を通じて考えたこと。感じたこと」

- ・災害ボランティアとは直接的な（物理的な）整備ではなく、被災者を支えることであることを実感した。
- ・震災から半年以上経ちましたが、未だマンパワーが必要な場所ばかりだと実感しました。この現状を地元に戻ってから周囲の人達に伝えて風化してしまうのを防ぎたいと思います。
- ・少ない時間でも多人数で作業すればみちがえるほど変わることに感動した。
- ・被災地の現状を自分の目で見ることができ、今後の自分の出来ることを改めて考える良い機会になったと同時に被災地の方々の思いの一部を共有することができたと思う
- ・重機で一掃できる部分と、人の手作業でしか出来ない、被災者の方の心に寄り添った細かな作業があるんだと感じました。
- ・すきまを埋めるのはボランティアの力が重要。
- ・津波の力も大きいけど、人間の力も大きい。

第31次隊（11月3日～11月7日）

大槌町赤浜地区の側溝のドロ出し活動、ガラス片回収活動
陸前高田市気仙町上長部地区の河川の清掃活動
釜石市箱崎地区のガレキ撤去活動、書類のドロ落とし活動



第32次隊（11月10日～11月14日）

釜石市箱崎地区のガレキ撤去活動、ガラス片回収活動
陸前高田市気仙町上長部地区の草取り活動
大槌町赤浜地区の山斜面清掃活動
遠野市「遠野まごころネット」の被災者交流会、
オープンハウス手伝い



第33次隊（11月17日～11月21日）

陸前高田市米崎町館地区の個人宅跡の清掃活動
大槌町赤浜地区の道路清掃活動、斜面のガレキ撤去活動
釜石市箱崎地区の道路や斜面の清掃活動



第34次隊（11月24日～11月28日）

大槌町赤浜地区のガレキ・漂着物の撤去、
周辺道路の清掃活動
陸前高田市米崎町の用水路・農道の整備清掃活動



参加者の声「活動を通じて考えたこと。感じたこと」

- ・メディアを通しての情報では震災から8ヶ月経って、かなり復興してきているように思えたが、実際現場は全く違っているとわかった。まだ津波直後のままの地域があり驚いた。
- ・自分ができる範囲で無理をせず長く続ける事が大切だと思った。
- ・支援内容が多様化していることを感じました。
- ・細かい作業ではあったが、それは人の力でしかできない作業なので、最後はやはり人の手が必要だと感じた。
- ・小さな積み重ねでもいざれはその成果が大きくなっていくと感じました。また、被災の方々は復興に向けて前向きに生活していらっしゃることに感銘を受けました。
- ・何回も来ることは難しいと思いますが、せめて岩手のことを、いつも忘れないようにしたいと思います。

第35次隊（12月1日～12月5日）

釜石市箱崎地区の個人宅跡地の清掃活動
大槌町赤浜地区の倉庫のガレキ撤去活動
大槌町安渡地区の歩道植込みのガレキ撤去活動



第36次隊（12月8日～12月12日）

大槌町赤浜地区の個人宅跡地のガレキ・ガラス撤去活動
陸前高田市上長部地区の復興イベント参加と片付け
釜石市箱崎地区の土砂かき出し活動



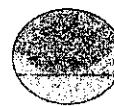
第37次隊（12月15日～12月19日）

大槌町安渡地区の道路清掃、工場跡地の片付け活動
陸前高田市米崎町館地区の山斜面の草刈りの片付け、
整地活動
釜石市箱崎地区の個人宅跡のガレキ・ガラス回収活動



第38次隊（12月22日～12月26日）

「サンタが100人やってきた！プロジェクト」に参加
大船渡市、大槌町、陸前高田市の仮設住宅や集会所、
イベント会場でお菓子やミカンを配る



参加者の声「活動を通じて考えたこと。感じたこと」

- あまりに被害の規模が大きいため、活動中は細かい作業しかできない事が少しもどかしかったです。しかし細かなニーズに対応できることこそボランティアの意義だと思いました。
- ボランティア活動の意義について認識をあらたにしました。活動の実利的な有効性よりも被災者の心の満足につながることが優先。
- 自分にできることはないとと思っている人でも思いきって参加してみると、微力ではありますが何かできることがあるのだとわかりました。
- ガレキの処理が問題とされているがぜひ多くの自治体で受け入れて欲しいと思った。反対している人にはぜひ被災地の現状を見てもらいたいと強く思った。
- ボランティアで見返りは期待しないが「ありがとう」といわれると嬉しいし、逆にこちらが勇気をもらった。

第31次隊～第37次隊 仮設住宅応援ボランティア

(11月3日～12月26日)

11月よりこれまでの活動に加えて、長期間（10日間）滞在し、
仮設住宅で生活される方々を支援するボランティアの活動を始めました。



生活支援班

仮設住宅を1軒1軒訪問し、お話をしながらどのような生活を
されているのか、困っていることはないかなど伺っていきます。

これまでの活動場所

大槌町（大槌、赤浜、吉里吉里、小鎌地区）でペアを組んでそれぞれのお宅を訪問。一緒に焼き芋を作ったり、球根を植えたりしながらお話を聞く。

依頼のあったものをお届け。
お店の開店チラシのポスティング



Cafe班（お茶っ子隊）

仮設住宅の談話室や集会室を利用してお茶会の時間を設け、外に出るきっかけづくりをしています。

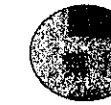
これまでの活動場所

大槌町（大槌、小野、小鎌、金沢、安渡地区）、大船渡市（清水、赤崎、下富岡地区他）、遠野市（雇用促進住宅）の仮設住宅内の集会所や小学校体育館等でお茶会を開き、住民のみなさんの交流の場としていただく。
絵描き教室やアロマテラピー教室を開く。



足湯隊

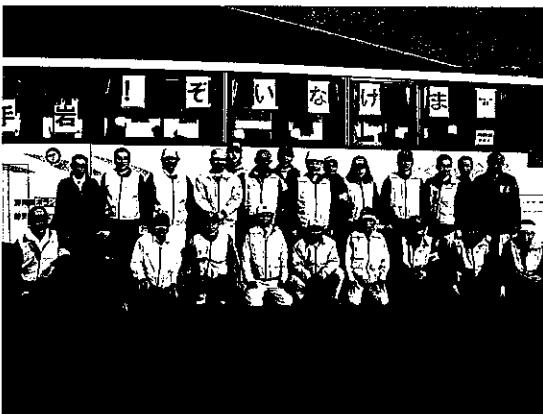
足湯をしながら手足のマッサージをすることでリラックスしていただきながら、様々なお話を伺っています。



参加者の声「活動を通じて考えたこと。感じたこと」

- 集会場でのお茶っ子隊。室内ということもあり、多くの人が集まって賑わった。ここでの会話で、近所の住民の安否を確認できることもある。大切な役割を持つ場であることを再確認した。
- 被災された方々と一緒にになって、心の痛みを共有しながら生きる希望、生き甲斐を見い出していくことを目的とした。
- 一人暮らしのお年寄りは仮設住宅のなかでも孤立してしまっている・・・という印象を受けた。最初は口数少なく、表情も無表情に近かったが、時間をかけてゆっくりお話する中で少しづつ心を開いてくれたと感じたことがあったため、お茶っ子隊や生活支援隊等ボランティアが間にに入って住民同士の交流の橋渡しやきっかけづくりにこれからもなっていかなくてはと思った。

第1次隊（4月7日～11日）



第5次隊（5月5日～5月9日）



第9次隊（6月2日～6月6日）



第13次隊（6月30日～7月4日）



第2次隊（4月14日～18日）



第6次隊（5月12日～5月16日）



第10次隊（6月9日～6月13日）



第14次隊（7月7日～7月11日）



第3次隊（4月21日～25日）



第7次隊（5月19日～5月23日）



第11次隊（6月16日～6月20日）



第15次隊（7月14日～7月18日）



第4次隊（4月28日～5月1日）



第8次隊（5月26日～5月30日）



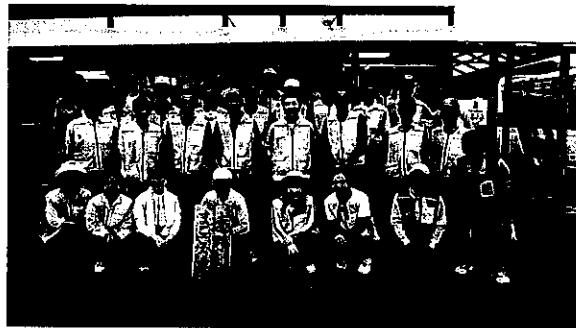
第12次隊（6月23日～6月27日）



第16次隊（7月21日～7月25日）



第17次隊（7月28日～8月1日）



第21次隊（8月25日～8月29日）



第25次隊（9月22日～9月26日）



第29次隊（10月20日～10月24日）



第18次隊（8月4日～8月8日）



第22次隊（9月1日～9月5日）



第26次隊（9月29日～10月3日）



第30次隊（10月27日～10月31日）



第19次隊（8月11日～8月15日）



第23次隊（9月8日～9月12日）



第27次隊（10月6日～10月10日）



第31次隊（11月3日～11月7日）



第20次隊（8月18日～8月22日）



第24次隊（9月15日～9月19日）



第28次隊（10月13日～10月17日）



第32次隊（11月10日～11月14日）



第33次隊（11月17日～11月21日）



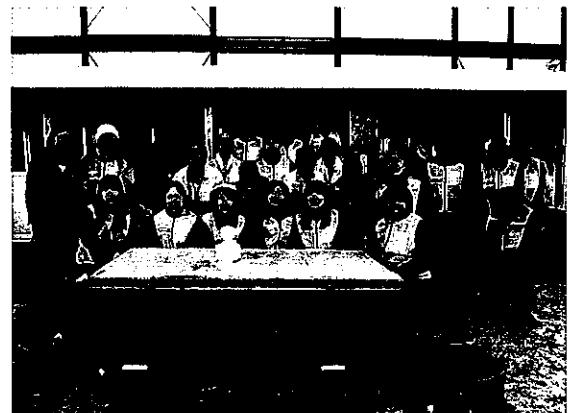
第34次隊（11月24日～11月28日）



第35次隊（12月1日～12月5日）



第36次隊（12月8日～12月12日）



第37次隊（12月15日～12月19日）

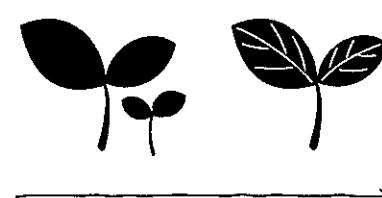


第38次隊（12月22日～12月26日）



資料編

- ・静岡県災害ボランティア派遣 派遣実績
- ・静岡県災害ボランティア派遣 募集要項（4月・5月派遣）
- ・関連新聞記事
- ・後方支援ネットワーク NPO 法人遠野まごころネット
リーフレット



静岡県ボランティア協会 東日本大震災災害ボランティア派遣実績

派遣期間	ボランティア			同行事務局		備考	活動場所	活動内容
	人数	男	女	人数	男	女		
4月7日～4月11日	25	23	2	1		1	第1次隊 久保田	陸前高田市 まごころ震開所式 高田小学校の土砂撤去
4月14日～4月18日	26	18	8	1		1	第2次隊 清水	陸前高田市 高田小学校の土砂撤去 支援物資配布手伝 個人宅清掃
4月21日～4月25日	24	18	6	1		1	第3次隊 横山	陸前高田市 大槌町 サンマ回収撤去 土砂かき出し 支援物資仕分け手伝
4月28日～5月2日	22	15	7	1		1	第4次隊 石上	陸前高田市 大槌町 サンマ回収撤去 土砂かき出し
5月5日～5月9日	22	16	6	1	1		第5次隊 孕石	大槌町 釜石市 おおつち保育園ドロかき出し 仮設住宅物資運び入れ
5月12日～5月16日	21	19	2	1		1	第6次隊 柚木	陸前高田市 大槌町 個人宅ドロかき出し 土のう袋整備
5月19日～5月23日	22	14	8	1		1	第7次隊 清水	陸前高田市 大槌町 ガレキ撤去 ドロかき出し まごころ広場のイベント手伝
5月26日～5月30日	22	18	4	2	1	1	第8次隊 久保田 山本	大槌町、陸前高田市 遠野まごころネット 避難所・仮設聞き取り調査 おおつち保育園移転地の除草清掃
6月2日～6月6日	32	23	9	2	2		第9次隊 鳥羽局長 山崎	大槌町 小鎌地区側溝清掃
6月9日～6月13日	34	25	9	2		2	第10次隊 横山 野村理事	大槌町 陸前高田市 側溝清掃 ガレキ撤去 三陸鉄道線路脇清掃
6月16日～6月20日	33	27	6	2	1	1	第11次隊 清水 土屋	陸前高田市 大槌町 家屋基礎木材撤去 小鶴川河原清掃
6月23日～6月27日	30	16	14	1		1	第12次隊 柚木	陸前高田市 大槌町 家屋基礎木材撤去 大槌川河原清掃(英の花プロジェクト)
6月30日～7月4日	29	26	3	2	1	1	第13次隊 鳥羽局長 小野寺	大槌町 陸前高田市 ガレキ撤去 おおつち保育園花壇整備
7月7日～7月11日	31	22	9	2	1	1	第14次隊 清水 喜多村	大槌町 陸前高田市 小鎌川河川敷清掃(ひまわりプロジェクト) ガレキ撤去
7月14日～7月18日	32	17	15	2	1	1	第15次隊 久保田 高田	大槌町 陸前高田市 小鎌川河川清掃 ガレキ撤去
7月21日～7月25日	33	27	6	1		1	第16次隊 柚木	大槌町 陸前高田市 小鎌川河川清掃 家屋庭整備 ドロかき出し ガレキ撤去
7月28日～8月1日	31	25	6	3	3		第17次隊 孕石 飯塚 岩辺	陸前高田市 遠野まごころネット 支援物資仕分け ガレキ撤去
8月4日～8月8日	26	19	7	1	1		第18次隊 山崎	大槌町 大槌町のお寺清掃
8月7日～8月11日	29	6	23	2	1	1	高校生企画 鳥羽局長 久保田	大槌町 ガレキ撤去 おおつち保育園夏祭り準備
8月11日～8月15日	24	15	9	2	1	1	第19次隊 石上 大石	大槌町 大槌町のお寺清掃 花壇の草取り 支援物資仕分け
8月18日～8月22日	29	21	8	3	3		第20次隊 山本 飯塚 土屋	陸前高田市 ガレキ撤去 駐車場整備
8月25日～8月29日	26	16	10	3		3	第21次隊 横山 横幕 佐々木	陸前高田市 大槌町 ガレキ撤去 ガラス片回収
9月1日～9月4日	30	18	12	3	1	2	第22次隊 清水 小幡 小幡	合風12号により活動中止 予定を早め帰郷
9月8日～9月12日	30	23	7	2		2	第23次隊 柚木 小幡	陸前高田市 大槌町、釜石市 ガレキ撤去 ガラス片回収 農業用水路ドロかき出し
9月15日～9月19日	30	25	5	2		2	第24次隊 横山 堀本	陸前高田市 大槌町 ガレキ撤去 ガラス片回収 農業用水路ドロかき出し
9月22日～9月26日	27	21	6	3	2	1	第25次隊 石上 芝 山本	釜石市、陸前高田市 大槌町 ガレキ撤去 草刈り 民宿の床はぎ、解体
9月29日～10月3日	25	21	4	1	1		第26次隊 山崎	大槌町 ガラス片回収 花壇整備
10月6日～10月10日	27	18	9	1		1	第27次隊 柚木	陸前高田市 大槌町 ガレキ撤去 ガラス片・小石回収 側溝ドロかき出し
10月13日～10月17日	34	24	10	1		1	第28次隊 横山	陸前高田市 大槌町、釜石市 ガレキ撤去 ガラス片・小石回収 側溝ドロかき出し
10月20日～10月24日	33	26	7	2	1	1	第29次隊 久保田	陸前高田市 大槌町、釜石市 稲穂、麦の種まき ガレキ撤去 道路清掃
10月27日～10月31日	38	28	10	2	1	1	第30次隊 山崎	陸前高田市 大槌町 ガレキ撤去 側溝清掃 麦の種まき
11月3日～11月7日	24	17	7	1		1	第31次隊 清水	大槌町、陸前高田市 金石市 側溝ドロかき出し ガラス片回収 ガレキ撤去 漁業組合の書類ドロ落とし
11月3日～11月14日	2		2				第31次隊 仮設応援ボランティア	大槌町、陸前高田市 傾聴、生活支援、お茶っ子隊
11月10日～11月14日	29	21	8	1		1	第32次隊 横山	大槌町、陸前高田市 金石市 側溝ドロかき出し ガラス片回収 ガレキ撤去 オーブンハウス準備手伝い
11月17日～11月21日	28	19	9	2	2		第33次隊 芝 孕石	陸前高田市、大槌町 ガレキ撤去 道路・斜面清掃 柏崎町白浜地区復興イベント参加
11月17日～11月28日	2		2				第33次隊 仮設応援ボランティア	大槌町 傾聴、生活支援、お茶っ子隊
11月24日～11月28日	25	16	10	1		1	第34次隊 横幕	大槌町、陸前高田市 ガレキ撤去 道路清掃 農業用水路・農道整備
11月24日～12月5日	4	1	3				第34次隊 仮設応援ボランティア	大槌町、大船渡市 傾聴、生活支援、お茶っ子隊
12月1日～12月5日	33	23	10	1		1	第35次隊 堀本	釜石市、大槌町 ガレキ撤去・ガラス片回収 側溝清掃
11月24日～12月12日	1	1					第35次隊 仮設応援ボランティア	大槌町、大船渡市、 陸前高田市 傾聴、生活支援
12月8日～12月12日	29	22	7	2	1	1	第36次隊 久保田	大槌町、陸前高田市 金石市 ガレキ撤去・ガラス片回収 イベント手伝
12月8日～12月19日	1		1				第36次隊 仮設応援ボランティア	大槌町 傾聴、生活支援
12月15日～12月19日	29	19	10	1		1	第37次隊 柚木	大槌町、陸前高田市 金石市 道路清掃 草刈り・整地 家屋跡ガレキ撤去
12月15日～12月26日	3	1	2				第37次隊 仮設応援ボランティア	大槌町 傾聴、生活支援
12月1日～12月12日	34	27	7	2	2		第38次隊 大石 鳥羽	大船渡市、大槌町 サンタプロジェクト、みかんサンタ

静岡県ボランティア協会 東日本大震災災害ボランティア派遣実績

派遣期間	ボランティア			同行事務局		備考	活動場所	活動内容
	人数	男	女	人数	男	女		
2月3日～2月13日	2		2	1		1	第39次隊 仮設応援ボランティア	大槌町、陸前高田市 傾聴、生活支援
2月10日～2月19日	1	1					第40次隊 仮設応援ボランティア	大槌町、釜石市、遠野市 傾聴、生活支援
2月17日～2月26日	1	1					第41次隊 仮設応援ボランティア	釜石市、大船渡市 お茶っ子隊、ガレキ撤去
2月24日～3月4日	1	1		1		1	第42次隊 仮設応援ボランティア	大船渡市 お茶っ子隊、ガレキ撤去
3月2日～3月11日	10	7	3				第43次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市 足湯隊、まけないぞう、ガレキ撤去
3月9日～3月12日	28	15	13	1	1		静岡つながり隊 大石	大槌町、陸前高田市 側溝清掃、復興イベント参加
3月9日～3月18日	10	5	5	1		1	第44次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市、大船渡市 足湯隊、まけないぞう、ガレキ撤去
3月16日～3月25日	7	3	4	1		1	第45次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市、大船渡市 足湯隊、まけないぞう、ガレキ撤去
3月23日～4月1日	7	4	3	1		1	第46次隊 仮設応援ボランティア	遠野市、釜石市、大船渡市 足湯隊、まけないぞう、ガレキ撤去
	1,188	834	355	71	29	42		
ボラバス派遣合計			計	男	女			
			1,259	863	397			

東日本大震災 静岡県災害ボランティア募集要項

2011年4月4日

企画 東海地震等に備えた災害ボランティアネットワーク委員会
特定非営利活動法人 静岡県ボランティア協会

1. 目的

3月11日に発生した東日本大震災は、戦後の日本が経験したことのない国家的な危機と受け止められます。死者・行方不明者は3万人に近づこうとしており、福島第一原発事故は、地震、津波、放射能災害と被災者に三重苦を背負わせています。

このような事態に本協会や東海地震等に備えた災害ボランティアネットワーク委員会では、被災地である岩手県遠野市にボランティア宿泊拠点（岩手県遠野災害ボランティア支援センター）を4月8日に開所させ、静岡県より災害ボランティアを派遣し、釜石市・大槌町・山田町など三陸沿岸市町に対する支援活動を開始します。この取り組みは、遠野市社会福祉協議会をはじめ地元NPO関係者等との連携・協働のもとに進め、被災地の人々に寄り添いながら一日も早く復旧・復興へつながる活動を行うことを目的に実施します。

2. 応募条件

- (1)心身ともに健康で、自分の健康管理や寒さ対策などができる人
- (2)ボランティア活動保険に加入した人

※出発前に市町社会福祉協議会で手続きを済ませて下さい。天災特約付をお勧めします。

3. 活動期間

- ・第1次隊（先遣隊） 2011年4月7日（木）～4月11日（月）
- ・第2次隊以降は、毎週木曜日から月曜日までの5日間を1サイクルとして、現地の状況を確認しながら、6か月程度の継続派遣を予定しています。

4. 移動手段 中型貸切バス

5. 日程（予定）

- 1日目：木曜日 19:00 集合（静岡県総合社会福祉会館・静岡市葵区駿府町1-70）、オリエンテーション
20:00 静岡出発（車中泊）
- 2日目：金曜日 7:00 到着、活動（遠野泊）
- 3日目：土曜日 終日活動（遠野泊）
- 4日目：日曜日 活動、終了後、岩手県遠野市出発（車中泊）
- 5日目：月曜日 6:00 静岡帰着、解散

6. 募集人数 各回25名

7. 活動場所

岩手県遠野市浄化センター敷地内に「岩手県遠野災害ボランティア支援センター」（宿泊拠点）を用意し、釜石市・大槌町・山田町などでボランティア活動をします。

8. 活動内容

被災地内の家屋の片付け・瓦礫の撤去（土砂のかきだし）・炊き出し・足湯サービス・送迎用大型バスのドライバーなど各種の活動。医師、看護師、保健師、臨床心理士、医療ソーシャルワーカー

一、社会福祉士・介護福祉士や保育士、調理師、理美容師など専門職として参加できる方は、被災地内で必要とされるニーズを別途調整の上で活動に入る場合があります。

9. 費用負担

- (1) 旅費 3,000円（静岡市内から岩手県遠野市までの往復旅費の一部をご負担願います）
自宅から静岡市内の集合・解散場所までの旅費は、自己負担下さい。
- (2) 宿泊費：1泊 500円
- (3) 食費：食堂などは営業していませんが、おにぎりなどはボランティア協会が有料で手配できます。
スーパーなどは開いています。

10. 準備品

現地は、夜や早朝は0度になる寒い地域です。また、拠点のプレハブも旅館のような宿泊設備は整っておりません。お風呂もありません。活動場所によっては瓦礫が散乱しており、安全対策も欠かせません。このような環境の中で活動することを頭に置いていただき、以下のリストを参考に持ち物を用意してください。

- リュックサック、ディバックなど…活動中に両手が自由に使えること
- 衣類（作業着・着替え）……ケガ防止のため長袖・長ズボン
- 防寒具……………ウインドブレーカー、防寒下着など
- 雨具（上下）……………汚れても洗い流せる、防寒にもなる。
- 長靴または安全靴……………鋭利な物を踏む可能性があり、丈夫なものがよい
- 軍手またはゴム手袋……………滑り止め付き・厚手の物が望ましい
- ヘルメット・帽子……………安全対策のため
- マスク……………ほこり、粉塵対策
- ゴーグル……………ほこり、粉塵対策
- 食料品……………到着日の朝食は必ず自分で用意する。栄養補助食品、カップ面などもあれば便利。宿泊拠点ではお湯は沸かせる。

ボランティアのための「むすび」等、有料でボラ協で用意できる。

- 飲み物……………お茶・スポーツ飲料など、現地でも購入可
- 寝袋……………毛布2枚程度は宿泊拠点にありますが、防寒の為必要。

□ 常備薬……………各自必要な物を準備

□ 健康保険証のコピー

□ 筆記用具・メモ用紙

□ ●運転免許証

□ ●懐中電灯・ラジオ

□ ●使い捨てカイロ

●印は用意できれば便利と思われます。

11. 企画主催・問合せ

特定非営利活動法人静岡県ボランティア協会

〒420-0856 静岡県静岡市葵区駿府町1-70 静岡県総合社会福祉会館2階

T E L . 0 5 4 - 2 5 5 - 7 3 5 7 F A X . 0 5 4 - 2 5 4 - 5 2 0 8

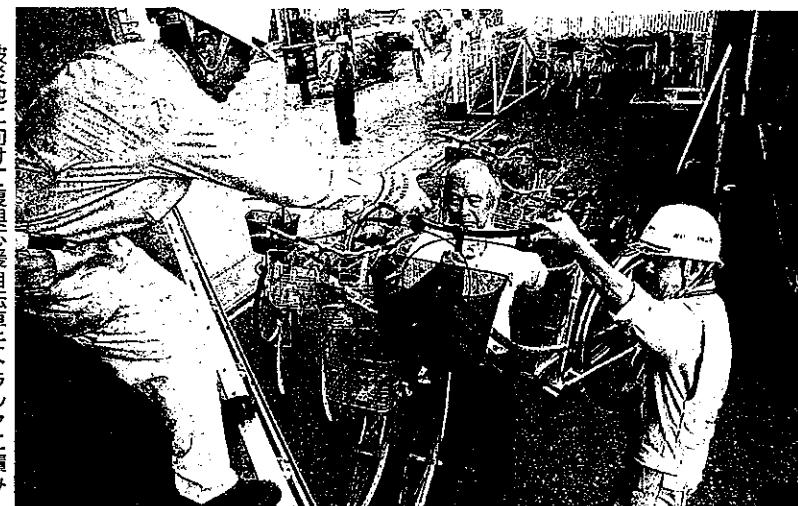
静岡県ボランティア協会への電話問合せは、朝9時から夜7時までの時間帯でお願いします。

被災中高生の通学手段に

静岡市は 10 日、東日本大震災で被災した岩手県大槌町に向け「復興応援自転車」を 50 台を発送した。仮設住宅で避難生活を送る中高生の通学や日常生活の移動手段として活用してもらいたい。

復興応援自転車は市内に放置されたスチックに放置されて撤去し、引き取り手がないものを再整備した。県ボランティア協会のアソシエーションが被災地での要望を受け、市に自転車の提供を依頼した。同市葵区の保育所で行われた出発式では、「がんばれ東北!」市は東日本大震災を受

復興応援自転車 岩手大槌へ 50 台



市内で避難生活をする被災者に対し、これま
で 32 台を無償提供して

ボランティアの 継続派遣支える

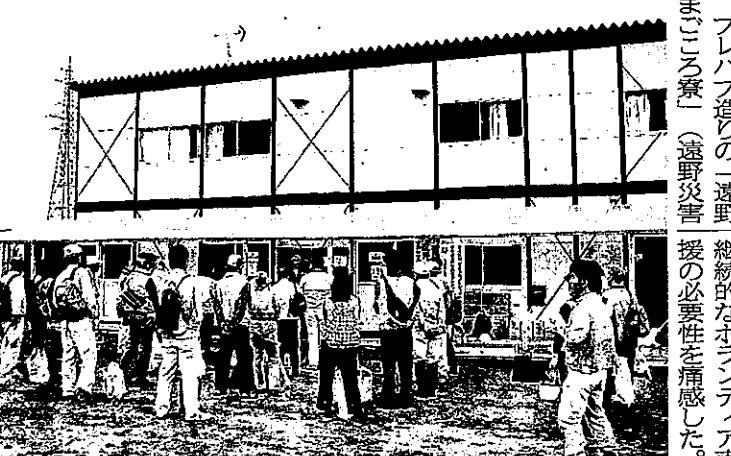
県ボランティア協会の宿泊拠点「まごころ寮」

日本大震災で被災した岩手県遠野市に建設した災害ボランティアの宿泊施設「遠野まごころ寮」が、同協会の継続的なボランティア派遣を支えている。同協会が

岩手・遠野

これまでに派遣した災害ボランティアは 22 隊 673 人。宿泊拠点の建設を伴つボランティア活動は、他県に先駆けた取り組みで、職を失った被災者の雇用の場にもなっている。

被災者雇用の場にも



静岡県ボランティア協会が派遣する災害ボランティアの宿泊拠点「遠野まごころ寮」＝岩手県遠野市

ボランティア支援センターは遠野浄化センターの敷地内に 4 月 8 日に開所した。約 70 人が宿泊できる。同じ敷地内には静岡県の現地支援調整本部もある。同協会職員は 3 月下旬に初めて被災地入りし、継続的なボランティア支援の必要性を感じた。静岡県の現地支援調整本部もある。

ボランティア支援センターは遠野浄化センターと同じ空きアパートなどを活用する案もあったが、被災者の入居を優先させるため、目前の宿泊施設の建設を決めた。

建設費用は日本財団からの助成金で賄つた。運営費は静岡県内の企業、団体からの支援金を充てている。まごころ寮の事務職員や食堂スタッフには、震災で職を失った現地の人を採用している。

同協会は最長 2 年間のボランティア派遣を決めた。ボランティアの活動は今後、仮設住宅で暮らす被災者の生活支援にシフトしていく。被災地のニーズ把握を担当する現地スタッフをさらに採用し、被災者の目線に立った支援を続けていく。

同協会の小野田全宏常

務理事は「まごころ寮を東海地震を見据えた災害開の仕方を考えこぎた

ボランティアの新たな展い」と話している。

日本列島太平洋沿岸を中心とした未開拓の被害をもたらした東日本大震災から半年が経過しました。被災地では復興に向かって歩みを進めている一方で、いまだがれきの撤去や家の清掃が進んでいない地域があります。

遠野市は、岩手県の内陸と沿岸を結ぶ中間に位置し、沿岸南部の地域に陸路で1時間、ヘリコプターで15分という立地環境にあります。このたびの震災で市役所本庁舎の



本田敏秋 遠野市長

ほんだ・としあき氏
1947年、遠野市生まれ。
神奈川大卒。岩手県総務部消防防災課長、商工労働観光部工業振興課長、企画振興部企画調整課長、久慈地方振興局長などを経て、2002年4月に遠野市長に初当選。合併により2005年10月、新遠野市の初代市長に就任。通算で3期目。

東日本大震災の被災地支援の拠点として、静岡県が「現地支援調整本部」を置いている岩手県遠野市の本田敏秋市長から、静岡県民に宛てたメッセージが静岡新聞社に寄せられた。

静岡県民へメッセージ

倒壊をはじめ、一部の道路や建物が被害を受けたものの幸いにも人的被害が少なく、発災直後から沿岸部の支援拠点としてこれまで300の機関・団体などが常駐し、被災地の復旧・復興の支援活動に当たっています。

そうした中、発災後間もなく3月19日、静岡県職員による先遣隊が全国のどの自治体よりも早く本市に入りました。甚大な被災地では復興に向かって歩みを進めている一方で、いまだがれきの撤去や家の清掃が進んでいない地域があります。

遠野市は、岩手県の内

陸と沿岸を結ぶ中間に位

置し、沿岸南部の地域に

陸路で1時間、ヘリコプ

ターで15分という立地環

境にあります。このたび

の震災で市役所本庁舎の

倒壊をはじめ、一部の道

路や建物が被害を受けた

ものの幸いにも人的被害

が少なく、発災直後から

沿岸部の支援拠点として

これまで300の機関・

団体などが常駐し、被災

地の復旧・復興の支援活

動に当たっています。

そのうち、発災後間もなく3月19日、静岡県職員による先遣隊が全国のどの自治体よりも早く本市に入りました。甚大な被災地では復興に向かって歩みを進めている一方で、いまだがれきの撤去や家の清掃が進んでいない地域があります。

遠野市は、岩手県の内

陸と沿岸を結ぶ中間に位

置し、沿岸南部の地域に

陸路で1時間、ヘリコプ

ターで15分という立地環

境にあります。このたび

の震災で市役所本庁舎の

倒壊をはじめ、一部の道

路や建物が被害を受けた

ものの幸いにも人的被害

が少なく、発災直後から

沿岸部の支援拠点として

これまで300の機関・

団体などが常駐し、被災

地の復旧・復興の支援活

動に当たっています。

そのうち、発災後間もなく3月19日、静岡県職員による先遣隊が全国のどの自治体よりも早く本市に入りました。甚大な被災地では復興に向かって歩みを進めている一方で、いまだがれきの撤去や家の清掃が進んでいない地域があります。

遠野市は、岩手県の内

陸と沿岸を結ぶ中間に位

置し、沿岸南部の地域に

陸路で1時間、ヘリコ

pterで15分という立地環

境にあります。このたび

の震災で市役所本庁舎の

倒壊をはじめ、一部の道

路や建物が被害を受けた

ものの幸いにも人的被害

が少なく、発災直後から

沿岸部の支援拠点として

これまで300の機関・

団体などが常駐し、被災

地の復旧・復興の支援活

動に当たっています。

そのうち、発災後間もなく3月19日、静岡県職員による先遣隊が全国のどの自治体よりも早く本市に入りました。甚大な被災地では復興に向かって歩みを進めている一方で、いまだがれきの撤去や家の清掃が進んでいない地域があります。

遠野市は、岩手県の内

陸と沿岸を結ぶ中間に位

置し、沿岸南部の地域に

陸路で1時間、ヘリコ

pterで15分という立地環

境にあります。このたび

の震災で市役所本庁舎の

倒壊をはじめ、一部の道

路や建物が被害を受けた

ものの幸いにも人的被害

が少なく、発災直後から

沿岸部の支援拠点として

これまで300の機関・

団体などが常駐し、被災

地の復旧・復興の支援活

動に当たっています。

そのうち、発災後間もなく3月19日、静岡県職員による先遣隊が全国のどの自治体よりも早く本市に入りました。甚大な被災地では復興に向かって歩みを進めている一方で、いまだがれきの撤去や家の清掃が進んでいない地域があります。

遠野市は、岩手県の内

陸と沿岸を結ぶ中間に位

置し、沿岸南部の地域に

陸路で1時間、ヘリコ

pterで15分という立地環

境にあります。このたび

の震災で市役所本庁舎の

倒壊をはじめ、一部の道

路や建物が被害を受けた

ものの幸いにも人的被害

が少なく、発災直後から

沿岸部の支援拠点として

これまで300の機関・

団体などが常駐し、被災

地の復旧・復興の支援活

動に当たっています。

そのうち、発災後間もなく3月19日、静岡県職員による先遣隊が全国のどの自治体よりも早く本市に入りました。甚大な被災地では復興に向かって歩みを進めている一方で、いまだがれきの撤去や家の清掃が進んでいない地域があります。

遠野市は、岩手県の内

陸と沿岸を結ぶ中間に位

置し、沿岸南部の地域に

陸路で1時間、ヘリコ

pterで15分という立地環

境にあります。このたび

の震災で市役所本庁舎の

倒壊をはじめ、一部の道

路や建物が被害を受けた

ものの幸いにも人的被害

が少なく、発災直後から

沿岸部の支援拠点として

これまで300の機関・

団体などが常駐し、被災

地の復旧・復興の支援活

動に当たっています。

そのうち、発災後間もなく3月19日、静岡県職員による先遣隊が全国のどの自治体よりも早く本市に入りました。甚大な被災地では復興に向かって歩みを進めている一方で、いまだがれきの撤去や家の清掃が進んでいない地域があります。

遠野市は、岩手県の内

陸と沿岸を結ぶ中間に位

置し、沿岸南部の地域に

陸路で1時間、ヘリコ

pterで15分という立地環

境にあります。このたび

の震災で市役所本庁舎の

倒壊をはじめ、一部の道

路や建物が被害を受けた

ものの幸いにも人的被害

が少なく、発災直後から

沿岸部の支援拠点として

これまで300の機関・

団体などが常駐し、被災

地の復旧・復興の支援活

動に当たっています。

そのうち、発災後間もなく3月19日、静岡県職員による先遣隊が全国のどの自治体よりも早く本市に入りました。甚大な被災地では復興に向かって歩みを進めている一方で、いまだがれきの撤去や家の清掃が進んでいない地域があります。

遠野市は、岩手県の内

陸と沿岸を結ぶ中間に位

置し、沿岸南部の地域に

陸路で1時間、ヘリコ

pterで15分という立地環

境にあります。このたび

の震災で市役所本庁舎の

倒壊をはじめ、一部の道

路や建物が被害を受けた

ものの幸いにも人的被害

が少なく、発災直後から

沿岸部の支援拠点として

これまで300の機関・

団体などが常駐し、被災

地の復旧・復興の支援活

動に当たっています。

そのうち、発災後間もなく3月19日、静岡県職員による先遣隊が全国のどの自治体よりも早く本市に入りました。甚大な被災地では復興に向かって歩みを進めている一方で、いまだがれきの撤去や家の清掃が進んでいない地域があります。

遠野市は、岩手県の内

陸と沿岸を結ぶ中間に位

置し、沿岸南部の地域に

陸路で1時間、ヘリコ

pterで15分という立地環

境にあります。このたび

の震災で市役所本庁舎の

倒壊をはじめ、一部の道</p

震災復興新たなニーズも



仮設住宅の敷地で被災者のために花のプランター作りをする人たち。静岡県のボランティアもソフト面の支援を開始する=8月中旬、岩手県釜石市(遠野まごころネット提供)

従来作業に加え 仮設生活ケア

県ボランティア支援バス延長

開く。11月以降は、静岡県からのボランティアの一部もこうした活動に加わる。同ネットの担当者は「がれき撤去などの作業もまた必要。加えて、ソフ面の活動も重視したい」と話す。

同協会の鳥羽茂事務局から、「11月3日出発の31次隊」(2011年10月24日付)

長は「仮設住宅でそれなりの生活が始まっている」という印象はあるが、先が見えないと指摘し、「継続した取り組みで安心を届けたい」と力を込める。

たる「被災地復興ボランティア」(10日間、1回30人)とともに、新たな「仮設住宅支援ボランティア」(12日間、1回30人)も募集する。問い合わせは同協会へ電054(2011年10月24日付)

東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県の被災地を支援している静岡県ボランティア協会は、ボランティアを派遣するバスの運行を12月末まで延長することを決めた。震災から7ヶ月余りがたち、厳しい冬を目前に控えた被災地。仮設住宅に移った被災者の「心のケア」にも、新たに取り組む計画だ。

バスは静岡市と岩手県遠野市の宿泊拠点との間を毎週、往復している。4月からボランティア延べ約1100人が現地入り。4泊5日(バスで2泊)の日程で、釜石市、大槌町、陸前高田市などを出しながら、被災者のストレスを和らげる目的で仮設住宅を訪ね、「足湯隊」「カフェ隊」などの活動を展

社説

<2011.10.24>

県民の支援欠かせない

静岡県ボランティア協

会は、東日本大震災で被

災した岩手県遠野市でボ

ランティアの宿泊施設

「遠野まごころ寮」の運

営を続けている。開設か

らのヶ月以上が経過し、

まごころ寮は拠点に活動

する派遣ボランティアは

1100人を超えた。

まごころ寮はボランティアの継続的な派遣を支えている。被災地の復興にはまだ時間がかかる。宿泊施設の建設を伴うボランティア活動は全国の先陣を切った取り組みで、今後も維持・継続するには資金的な援助は欠かせない。県民の支援が必要だ。

これから迎える東北の寒さに備えるため、まごころ寮への暖房器具の配備など出費はかかる。寮の建設費は日本財團の助成で賄つたが、運営費は企業、団体からの協賛

金、個人の寄付などを基に県ボランティア協会が負担している。

東日本大震災の直後、被災地に入った静岡県のボランティア関係者は真っ先に宿泊拠点の必要性を感じた。学校や集会場、寺院などが被災者や救援に駆け付けた自衛隊員や警察官の利用が優先された。テントを張るにも寒さが厳しく時期で、自前の宿泊拠点の開設を即座に決めた。

プレハブ2階建ての遠野まご

寮は静岡県が支援対策現地本部

を開設した遠野市浄化センター内

に建設した。50人が宿泊できる広さで、食堂や厨房も備える。事務局のスタッフや厨房の料理人は被災地の雇用支援のために遠野市の住民を採用した。

災害ボランティアは遠野市に向

けて、毎週木曜夜にバスで静岡を出発する。まごころ寮での泊

月曜の早朝に静岡に戻る。現地で

に派遣するバスの運行を年末まで

延長することを決めた。がれきの処理のほか、10日間にわたり仮設住宅の住民の生活支援に当たるボランティアも募集する。こうした活動ができるのも宿泊拠点があるからだ。

スケジュールはハードだ。ただ、現地での宿泊や食事の心配は要らない。県ボランティア協会の募集に毎週、途切れずに30人前後が応募しているのも、まごころ寮があれほどぞう。神奈川県も静岡の取り組みを手本に净化センターに公費で宿泊拠点を開設した。

静岡県ボランティア協会は現地

に津波被害を受けた地域を中心

に、がれき撤去や泥のかき出しに当たっている。

斯くて、まごころ寮の存在意義は高まっている。県ボランティア協会への県民の寄付が寮の運営を支え、被災地復興の大きな力になる。

斯くて、まごころ寮の存在意義は



東日本大震災で津波から避難した様子などを語る八木沢さん
=静岡市役所静岡庁舎

県保育所連合会中部支部と静岡市、県ボランティア協会は 12 日、東日本大震災で壊滅的な被害を受けた岩手県大槌町の大震災から 8 カ月が経たる岩手県大槌町の大震災で津波から避難した様子などを語る八木沢さん(左端) =静岡市役所静岡庁舎で開いた。東日本大震災で津波から避難した様子などを語る八木沢さん(左端) =静岡市役所静岡庁舎で開いた。

「絆」という財産得た

震災 大槌(岩)保育園長が講演

静岡

過ひ、八木沢さんは「震災で失ったものはたゞさ
んあるが、絆といふ財産を得られた。復興に向か
つて前進する」ことが何よりも重要となると心に決
めた。子どもたちに愛情を注ぎ、大槌町で生まれ
育つて良かつたと思って」などと語った。

構えなどを学んだ。

遠野の昔話で癒やし

柳田国男の「遠野物語」で知られる昔話の里・遠野市。東日本大震災で被災を受けた沿岸部へ車で約1時間という地の利を生かし、支援活動の拠点となっている。遠方から訪れた人たちの疲れを癒やそうと、昔話の語り部でつくる「とおのの昔話語り部いり火の会」の女性たちが、ボランティアの宿泊所で公演を続けている。支援の支援は60回を超えた。

いろり火の会



公演好評 60回超える

ボランティアの宿泊所で

内田芳子さん

(左端)

=遠野市

で

音

話

を

語

る

内

田

芳

子

さ

ん

で

音

話

を

語

る

内

田

芳

子

さ

ん

で

音

話

を

語

る

内

田

芳

子

さ

ん

で

音

話

を

語

る

内

田

芳

子

さ

ん

で

音

話

を

語

る

内

田

芳

子

さ

平成 23 年 12 月 26 日 静岡新聞

と、自の直直（シカ）は子どもから高齢者まで大好評（ヒトツブシ）だ。同協会の鳥羽茂事務局長は「静岡県民の気持ちのこもったミカンで、少しでも元気をつけてもらえれば」と話した。

県産ミカン
被災地に寄贈
県ボランティア協会
は22日、静岡市葵区の
県総合社会福祉会館
で、東日本大震災で被
災した岩手県の仮設住
宅にクリスマスプレゼントとして届ける静岡
県産ミカンの発送作業
を行った。
11月下旬からミカン
の提供を呼び掛けたと
ころ、県内のミカン農



ミカンの入った段ボール箱をトラックに積み込む関係者＝静岡市葵区の県総合会福祉会館やボランティアがトラックに積み込んだ。ミカンの寄贈先は大槌町と陸前高田市の仮設住宅で暮らす約4300世帯。同協会が被災地向けて運行する今年最後のボランティアバスの参加者やミカン農家が仮設住宅を訪ね、被災者に手渡す。同協会の神田均理事長は「静岡県民の思いが詰まっているのを味わってほしい」と話した。

被災地 避難場 生存權

から1ヶ月。東京電力方面第一原発事故の後
に、新規出力が始まりました。
この間に、出力開始が始まりました。
任職や仕事に就かれ、日本国憲法を堅持する
方針を継続していきたい。我が黨の堅定な立場
は、ハドニア協会を通じて全国へと
発信する機会をえた。

岩手・県民ボランティアルボ

津波で住家が根こそぎ流された海沿いの街から約5キロ内陸の農村地帯。被災者が住む十数軒の平屋のアパートが並ぶ。12月初旬の岩手県大船田。ボランティアの中野義理さん(21)=静岡市=は、冷たいうれが降りしきる中、仮設住宅を手配す。指さし、設計の悪さを懸命に訴えた。別の住中は風が入る方向に玄関があり、高齢の女性が毎日ひじ立てていた。一人暮らしの世帯が目立つ。津波で家族を亡くしたと生き残り生きていた。掛ける言葉が見つからなかつた。

「おれの人生は、このまま

終着点にせらるる運転が出来た者たちは難所からの仮設住宅にうなぎで来た。「長く生き移つたが、震法25条の健てこれで、ここにいゆつたら康文化的な最低限度の生活」が保障されたと言えるのだろうか。じつと顔を続ける人々の姿に、由緒ある東北への想いが感じられる一方で、切なさもあつた。

12月初旬、岩手県大船田町の仮設住戸の集合住宅に

「お歳暮ですが、おまわりありがとうございますか」。吉を捕らえた理事長は特別養護老人ホームを運営する。長年、高齢の風景がかかるがえる。被災した静岡市、静岡大2年(20)テアの藤原洋平さん

二は、茶話会に集まつてゐる

孤独抱え耐える高齢者

じゆるど 脚綱を置ける程度の狭い玄関に、50代の女性が顔を出した。夫をさうへ書らし。津波で自宅を流されだ。アソセントの毛糸の帽子を手渡すと、女性は「だんだん人が来なくなっていて、お詫ねできてくれて、本当にうれしい」と言葉かなに語った。

大経町だからでも、約50所の仮設住宅に約2千世帯が生活する。夜行バスに約10時頃揺られて訪れた中野さんは、「活動期間の10日間、仮設住宅を回り、被災者の懸念したこと等を目の当たりにした。

高齢の男性は部屋の中を

A black and white illustration of a man in a suit and tie, sitting at a desk and looking down at a small object in his hands. He is wearing glasses and has a serious expression. The background shows shelves filled with books or papers.

左ノサウルス

高松市役所の議会室での茶話会で、高松建設住宅の担当者の話に耳を傾ける藤原さん(左)=2011年12月初旬、岩手県大船渡市

者は避難所から仮設住宅に移つたが、憲法25条の「健 康で文化的な最低限度の生 活」が保障されたと言える のだろうか。じつと面を繋 げる人々の姿に、中野さん は東北人の強さを感じ る一方で、切なさも感じた。
12月初旬、岩手県大船渡 市の仮設住宅の集会所。示 ランティアの藤原洋平さん (20) は、静岡市、静岡大2年 には、茶話会に集まってきた 十数人の高齢者を歓迎で 出迎えている。

高校まで吉手工具で育った。大慶では実家こそ無事だったが、隣駄や友人が警報した。「出身は鎌倉です」とひびきわたる「テープ」を畠代が青筋をたわわにわらわに實行して近所をだらだらと尻尾を垂げた。話すだけに、普段は間では使わない単語がまた出てきた。

藤原さんは何所かの奉話会に参加し、「いの奈系」本前に集つては實行組む。「外に出る機会がない」「相手がいた」も振つたる声を多く聞いた。「せひ仮設住宅が、實情者が学々集合って生きられる場所でもうつてほしい」と藤原さんも熱く願つた。(高松勝)



●遠野まごころネットとは？

遠野まごころネット（旧称：遠野市被災地支援ボランティア・ネットワーク）は、平成23年3月11日の東日本大震災による岩手県沿岸部の被災者を支援するべく、遠野市民を中心に結成された組織です。

震災で未曾有の被害を受けた三陸沿岸地域と遠野は、歴史的に深い絆で結ばれています。市民たちの多くは、沿岸の人々と苦難を分かち合い、再建に向けて共に歩んでいくことを望んでいます。

7月27日にNPO法人となった遠野まごころネットは、これまでの瓦礫撤去や心のケア、物資配達といった復旧支援のみならず、復興へ向けた多面的なサポートを続けていきます。

●岩手県の中の遠野市

遠野市は、東北自動車道や東北新幹線沿いの内陸平野部（盛岡・花巻・北上・奥州・一関など）と、三陸沿岸地域（宮古・山田・大槌・釜石・大船渡・陸前高田など）との中間に位置しています。

内陸平野部の各拠点都市から沿岸被災地へは片道約100km程度、これらを拠点とした支援活動は時間的にも身体的にもボランティアへの負担が大きくなります。中間の遠野から沿岸へはその半分以下の距離。こうした地理的状況を活かし、内陸と沿岸を中継し、人や物資、情報が集散するHUB（ハブ）としての役割を遠野市は担っています。



●ボランティア活動の紹介



ちからしごと

当初から、現地の要望を受けて、瓦礫除去、家屋の泥出しと清掃、サンマ等の除去、除草などの地道な活動に根気強く取組んでいます。また、被災耕作地や休耕地への復旧支援を通じて農業再開と避難生活の食料自給の向上を目指しています。最近では瓦礫除去も、女性の方にも可能な細やかな作業現場が多くあります。



コミュニティ維持と記憶風化の防止

大槌町や陸前高田市などに、生活支援と地域のコミュニティ維持のためのオープンスペースを設置運営。郷土芸能等の公演や各種支援サービスを実施してきました。さらに現在、農業などの地域産業再生と新規産業創出を目的とした「まごころの郷（さと）」も始動、農作業や日曜大工など、取組みがいのある活動メニューが増えています。



ふれあいによる心のケア

避難生活の長期化につれて、心身の不調や自殺など、深刻な問題が表面化しています。私たちはこころのケアを目的とした各種支援活動を実施し、仮設住宅への分散で希薄になった地域の絆のカバーのための見守り支援に取組んでいます。今後は更に活動を拡充して社会的弱者などへの広範なパーソナルサポートを確立していきます。

後方支援、その他

私たちは、団体・個人を問わず、岩手での支援活動を望む方々と現地を繋いでいます。また、ニーズを収集し、寄せられた多量の支援物資を被災地へ届けてきました。「ちから仕事」や「心のケア」といった活動以外でも、多様な活動プログラムがあります。今後も、多角的に被災地の生活や産業の再建に向けて活動を続けていきます。

●ボランティア活動の今後

これまでの緊急対応的な支援と併せて、被災者の仮設住宅への移行・復興の模索など、現地の変化を反映して、「生活再建」や「地域社会の再建」に向けた支援も重要になります。私たちの復興イメージは、被災以前への回帰ではなく、被災地と全世界の支援者との協働で持続的に発展してゆく未来です。そのため遠野まごころネットは、主要な5分野のサポート体制を構築し、被災地住民と協働で地域再生へと取組んでいきます。

既に実施中の復興支援事業

- まごころの郷（さと）：沿岸各地に大規模用地を確保し、共同の農園や集会施設などをつくり、地域のコミュニティ再生や農業、商業等再興の「核」づくりの支援事業。
- 起業支援、起業支援の組織づくり：産業再生と雇用創出、そして被災者の見守り支援を目的に、地域住民による新規産業立ち上げを支援しています。既に今年中の設立を視野に、大槌町や陸前高田市などで、幾つかの商業施設を設営中。「農産品などの直販」「お弁当の製造販売・被災者への配食サービス」などを展開していきます。

この他にも多様な支援事業を実施中です。これらの事業へのボランティア参加も広く募集中です。

●会員の募集について

遠野まごころネットでは当団体の被災地支援活動に賛同いただける会員を募集しています。皆様から寄せられた会費は、被災地支援活動の運営費として大切に使わせていただきます。

- 個人正会員：入会金5,000円 年会費一口5,000円 ■個人賛助会員：入会金なし 年会費一口1,000円
 - 団体正会員：入会金10,000円 年会費一口20,000円 ■団体賛助会員：入会金なし 年会費一口10,000円
- ※正会員とは、総会での議決権を持つ会員です。活動サポートのみでなく、運営にも積極的にご参加いただけます
- ※賛助会員とは、運営への参加はありませんが、当団体の活動を後方支援していただける方への会員枠です
- 支援金窓口 銀行名：ゆうちょ銀行 口座名義：特定非営利活動法人遠野まごころネット 口座名義（カナ）：トクヒトオノマゴコロネット ①ゆうちょ銀行以外からご入金の場合 支店名：八三八（ハサンハチ）支店 店番：838 口座種別：普通口座 口座番号：1933622 ②ゆうちょ銀行からご入金の場合 記号：18340 番号：19336221
 - お問い合わせ先 〒028-0527 岩手県遠野市大工町10-10 遠野浄化センター内 電話：0198-62-1001 FAX：0198-62-1002 E-mail：tonomagokoro@gmail.com

■遠野まごころネット HP：<http://www.tonomagokoro.net>

〈5分野のサポート〉

〈基本的復旧サポート〉
瓦礫の撤去・支援物資の配達など、「復旧」にかかるマンパワーはまだまだ必要

〈個人サポート〉
生活支援センターを設け、行政や各地社会福祉協議会等と連携。買い物難民や病弱者への同行支援、孤独死や自殺防止へのパーソナルサポートを強化展開。

〈地域サポート〉
「まごころの郷」づくり、井戸端カフェなどの開催などを通じて、地域のコミュニティ再生・生活への安らぎ・産業再生支援。

〈起業サポート〉
被災地で新しいビジネスアイディアを実現を後押しする支援体制の確立。雇用の創出と拡大。ファンドレイジング等の活用。

〈検証サポート〉
各分野の専門家と現地をつなぎ、被災直後からの被災地の状況と支援活動を検証、次世代に役立つものに。



「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」

つながり 寄り添う

－東日本大震災被災地支援活動 静岡県災害ボランティア 活動記録－

発 行 平成24年3月

編集・発行 特定非営利活動法人静岡県ボランティア協会

〒420-0856 静岡市葵区駿府町1番70号 静岡県総合社会福祉会館2階

Tel.054-255-7357 Fax.0545-254-5208

E-Mail evolnt@mail.chabashira.co.jp URL <http://www.chabashira.co.jp/~evolnt>

印 刷 大日紙業株式会社